

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 土方久功日記Ⅱ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土方, 久功 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00001015">https://doi.org/10.15021/00001015</a>



だった。兄は音枝の所で寝て居た。音枝の話では、兄は昨夜十一時過ぎに帰って来たのだが、あんな時間まで外に立って居たのだそうで、それから音枝が何か云っても、只々さめざめと泣くばかりなので、兎も角も寝かせたのだそうである。私は兄が永い間の放浪な散漫な生活の重荷の為に、ひどい極端な神経衰弱になって了ったのだと思ふ。そうして反省と悔恨を匡正の意志にも拘らず、脅迫観念的な惰性が、容赦もなく兄を現在から脱けさせないのだと思ふ。まことに気の毒であるが、どうすることも出来ない。(中略)兄は、午後起きてからも、母の前に只々さめざめと泣くばかりだったそうである。

日記には、佐伯祐三との交友も記されている。3月24日、久功は紀伊国屋で開かれていた佐伯の個展に行った。会場にいた佐伯とは、久々に会った。佐伯の留守の間のことなど1時間ほど話をした。

佐伯の絵について、久功は、4月30日に、次のように書いている。

佐伯君の画は、少しはなれて見ると非常にいい。色がきたなくてタッチが荒くて、調子のいい絵はみんなそうだが——ラブラートの絵をはじめ、仏蘭西美術でよく——経験するように、佐伯君の画はすばらしく調子がいい。

(中略)

佐伯君の色は、どれもこれもきたない。だが佐伯君の絵は実に美しい。

佐伯君の画き方は、佐伯君の洋服のようにかまはないと云った風だ。だが佐伯君の絵は実に綺麗だ。

佐伯君の絵の対象は街の中に在る。街の中なら、どこの角でも、路でも、部分でもかまはない。佐伯君は、「アヴェニュー・ド・メーン」をかき、「赤い家」をかき、「白い家」を「青い家のある通り」を、そうして「広告」を画く。

(中略)

君はヴラマンクのお弟子であるが、君がヴラマンクから貰ったものは、ヴラマンクの持って居ないもので——云ひかえれば、君の絵はヴラマンクの絵のように単一でなく、ヴラマンクのように一本調子でなく——君の絵はヴラマンクのよりも、いい意味で〔複〕の腹雑さを持ち、色調に於ても豊かで、ヴラマンクのよりもコンストラクチヴな——そうして其処に叙実以外の内面的な深さを持ってゐる。君の絵には、明らかに一見ヴラマンクの影響を読み得るにしても、同時に性格的な、根本的な相異が、君の絵を犯すべくもなく君らしい絵にしてゐる。(中略)だが又私に云はせれば、ヴラマンクよりは、佐伯君の方がずっとうまい——だが又これが、あんまりとんでもない言葉であるならば、少くとも私はヴラマンクの絵は嫌ひで、君の絵は好きなのだ。

この11冊で、最も大きな出来事は、母親の死であろう。7月4日の深夜、母親が動悸がすると訴えるので、弟・久顕が医者呼びに行った。いつものぜんそくが軽く来ただけだと思っていたが、6日の午前0時45分、心臓麻痺で息絶えた。その日の午後、告別

式を行った。

母親の死により、高円寺の借家を引き払うことになった。久功は、余計な荷物を妹・英子の所へ持ち込み、彫刻は小石川に運び、身の回りの荷物を鎌倉に運んだ。叔父・昌生の家での居候生活が始まった。毎日みじめな思いをしたことであろう。9月ひと月、日記には天候以外のことはほとんど記されていない。そこから、久功の置かれていた当時の状況がわかるであろう。

〔表紙〕

〔11〕 千九百二十六年十二月十七日ヨリ

大正十五年

千九百二十七年十一月二十二日迄

昭和二年 HISAOKATSU. H]

〔十二月〕

十六日

○電車の中で 母の背中の上で

赤ン坊が泣いた

泣いて泣いて泣き止まなかった

隣りの労働者が顔を突出して

臆病そうに よしよし と云った

前の紳士が新聞から目を上げて

赤ン坊を見、母を見

すぐに新聞に目を返した

母親はうすへ赤ン坊の心を知って

俯いて本能的に体をゆすった

赤ン坊はだがどれにも応へないで

泣いて泣いて泣き止まなかった

気弱な労働者を撥ねのけ

凶々しい紳士を踏みつけ

優しい母をも容赦しないで

赤ン坊は取りのぼせて喚いた

では赤ン坊の真裸の説教を聞くがいい

——諸君！

諸君はこんな箱の中に居て退屈しないのか

立て！ こんな箱から飛び出して

自由の往来を濶歩せよ

諸君はこんな「社会」の中に寿司詰めになって居て耻ぢないのか

立て！ 大空のように遮るものもない世界へ

率直な感情が思ふさまはばたき得る

「人間」の世界へ！

十七日

曇、薄陽。午後、三沢が来てくれる。

十八日

時々、晴れたが雲が濃く、午後からは切るような風が吹いて、道も凍りついて居る。

午後、江波を尋ね、一緒に<sup>〔庸治〕</sup>金沢の所に行ったが、留守なので、暫らく待ったがなかなか帰らないので、夕方帰る。

聖上いよ〜御悪いらしく、今夜深更御還<sup>啓</sup>□幸とて、何処となく外は淋しい。

十九日

晴。風烈しく寒し。昨夜の満月の後、どうした気まぐれか、今朝起きたら、乾いたさ〜な雪が一寸余積って居る。気温が低いので、そんな小雪が夜までも溶けない。

新聞で見ると、聖上には天祐全くあらせられて、おもちなほしになり、還御御中止になった。

二十日

寒むい！そして私は四五日前から、お定りの冬の頭痛が烈しくてやりきれない。

---

○今夜も月は

硝子戸の外に冷え〜と亘へてゐる

月よ、と私が云ふ

今晚は……と月が云ふ

——だが、もう沢山

君達からそんな風に親しげに呼ばれるのはもう沢山……

二十一日

✓雪曇り火に倚りて紅茶あたたむる

---

朝から終日曇って寒い。夜に入って雨になる。

二十二日

晴、曇、小雨。午後一時に新橋駅に行った。ちきに高沢ミス子と松村イソ子とが来た。三人で夕方まで銀座をあっちからこっちへ、こっちからあっちへ。

---

〔欄外に記す〕  
[炬火 2年4月]

○私はおきて居る

誰ひとり私を呼ぶものもない夜の中に

記憶、回想、過去

明日、未知……最後

ほんのさっき起った事実

又遠く遠く十年二十年前の

そして知識と想像の三千年前までも

人間の感情の連鎖はそのようにしてはびこり

ほんの一寸先方の事実又明日の、明後日の

未知の中になされる推測と予想……最後まで

希望と絶望の綾はそのようにして伸びる

常に刻々に動いてやまない現在から

刻々に過去が産れ、過去が展がり

そのようにして未来は蝕まれ、蝕まれ

而も尚続く延長……子孫

私の祖先が明日に望んだ声——たった一つの声

そして私も未知に望むであらう光——たった一つの光

そして私の子等も又それへの未来に望むであらう絶対

あゝ、絶対はそのように遠く遠く

常に只に無限の未来にかかって居る

無限の未来に

何と莊嚴、何と神秘！

決して到達されない所の目標

決して満されない所の希望が

かくも心をとらへる力の何といふ神秘□□

私の祖先が私に望んだたった一つの声

私が私の子等に望むたった一つの希望

彼等がそれへの子孫にかけるであらう光は

只に無限の彼方に於けるその存在が

私を生かし、私の祖先を生かし

そこに積み上げた回想——過去

たった三十年の過去に私が得た追憶でさへ

何と豊富

決して到達されない光、宇宙の絶対が

自らは遠く彼岸にあってなほ

過去を産み、過去を展げ  
 刻々に絶え間なく現在を移らせ□□□進め  
 明日に明後日に希望と絶望との夢を置く  
 何と莊嚴なる  
 只に無限の彼岸に於ける或る存在  
 私はその神秘なる或る存在によって  
いいや [否、唯にその存在の予想によって] → 〔欄外に記す〕  
 過去を豊富にし、追想に花を飾る為に  
 明日を予想し明後日を期待し  
 希望と絶望に次ぐ希望と絶望の……最後まで  
 未知の中に依頼し  
 刻々に運命づけられてゆく現在  
 たった今  
 ここに、誰一人私を呼ぶものもない  
〔欄外に記す〕 [(たった一つの光の予想を前に)] →  
 闇夜の中に私はおきて居る<sup>109)</sup>

二十三日

晴。風だって寒い。

寛ちゃん。

珍らしく長い手紙をありがとう。

先日は失礼。あれからあれを彫り上げ、其の次の一つを彫り上げ、いよ—木がなくなってしまうので、今日は色つけにとりかかった。うまくゆくかどうかまだわからない。

扱て今日はお面ともおこても出かけない。何故なら喰ひ違ひが余りに大き過ぎるからだ。只まことに無駄のようだが、斯う云っておかう。君は僕に同情し過ぎてゐる。そうして反対に、僕は露骨に君に云ふ。

僕は君の有目的観がわからない。

僕は喰ひ違ひが大き過ぎると云った。だがこれに就いては、もう暫らくしてから君にゆっくり吟味して貰ふ機会があると思ふから、今長々と書かないことにする。多分来年の二月頃から、ぼつ—僕の気まぐれ芸術論を（出来得ればだ）発表したいと思つて居るから。

だが茲にたった一つ僕の名譽の為に、君に訴へ度いと思ふのだ。それは、君が僕の「へ



ッ」の意味と価値とを、極めて平面的に叙実に「喜劇的に」受け取ってくれたことだ。これは、僕としては少しなさけない気がする。若しもこれがしかく平面的な喜劇であるならば、如何に僕が自惚れの強い人間であっても、得々として斯んな旗をふりかざしはしないだらう。ましてこの「ヘッ」の中に、千万無量なるものを意味づけたりするような事を敢へてしようか。だがここでは、これ以上の説明を略することにする。何故と云って、その為には僕の虚無思想から説明されなければならないし、それから此の虚無思想の上に、如何にして積極主義の殿堂が築かれるかに就いては、相当の過程が説明されなければならないからだ。短い言葉で暗示的に云ふならば、一切空の現はれが如何に運命的であるか、而もそれにも拘らず、それが余りにも華々しく絢爛多角である為に、僕は泣くことも出来ないで笑ふのだ。そうしてこの悲劇が、或ひは悲喜劇が僕の積極主義と結びついて、一切の現はれを「ヘッ」で片づけさせるのだ。だからこそ世間風には、何う最眞目にみても、気持よく「ヘッ」とはゆかないようなものが、御承知の通り立派に僕の作品であり得るのだ。猶云ふならば、君が如何にだまって見られる彫刻を作っても、それが僕の気に入るならば気に入るだけ、僕は僕らしい微笑の下から斯う云ふだらう、「ヘッ」と。

ひどく寒いぢやないか。二月末までもこんな寒さが続くと思ふと、身ぶるひが出る。うう寒む。

久功

---

○今夜下弦の月が黄いろく窓の外にかかってゐる  
何故私はそれを見たのか  
多分そこにあしたの計画が読まれるからか  
多分寒く、全き静止の夜に  
(真夜と静屍とは私の最も豊かに充満した夢だからである)  
恐らくは余りにも冷たい  
それが月であるからか

情熱と非情熱とがここに一体となって  
緊張の極致なる緊張のデリリアムがここにある<sup>110)</sup>

[欄外に記す]  
[炬火2の二]

二十四日

晴、午後曇り、寒くて頭が痛くて何にもしない日、午後半日、佑サンの処でぶす〜話して居る。夜、ラヂヲの報に依ると、聖上にはいよ〜御急変、御熱四十度を越え、

御脈百五十を越え、呼吸五十八と承る。為に葉山は寒夜大雑踏の由。

○今夜遅い月が潤んだ瞳のように窓の外にためらって居る  
 何故私はそれを見たのか  
 恐らくは所作に飽きた心が彼方の静止を思ったのか  
 恐らくは現実の絶望が非現実の夢に  
 (真夜の孤独には何やら窮極に関連する思想が目醒ますようである)  
 更生の神秘を幻覚させる  
 それが月であるからか

過去と未来とがここに総体となって  
 幽玄の奥なる堪へ入るばかり非情の哀愁がここにある<sup>111)</sup>

[欄外に記す]  
 [炬火2の二]

## 二十五日

聖上陛下には今暁一時二十五分、遂に崩御せらる。

今夕、甘露寺方房の処に呼ばれて居たので、午後、金沢を尋ねて、四時過ぎ、甘露寺の処に行った処、葉山に行つて六時に帰る由なので、一時辞し、江波を尋ねた処、江波は大阪に行つて留守なので、神田をぶら〜歩いてみる。さすがに暮とは思へない程静かではあるが、東京の真中だけあって、人出は道に多い。六時に再び甘露寺の家を尋ね、一緒に食事して九時まで久しぶりに話しこんで帰る。夕方からめっきり寒さがまして、凍てついてゐる。

✓響うせて遠のきし汽車かな電気消す

改元昭和

## 二十□七日

午後、丸善に行き金沢君に会つて、大浦氏に<sup>[紹介]</sup>照会して貰ふ筈だったが、大浦氏が居なかつたので、明日午前中に行く約束をして、夕方小石川へ行く。小石川で遅くなって、新宿で電車を失ひ、真夜中自動車で笹塚にゆき、昇<sup>[山口]</sup>さんの処を起して宿まる。

## 二十□八日

丸善にゆき、大浦氏に会つて、展覧会の会場借方を交渉して昼過ぎ帰り、夕方、炬火

の集が渋谷の大黒氏の処であったのでゆく。印刷が遅れて、発送が遅れて、今夜も遅く家に帰る。

三十日

午後、尾上様が親サンをつれて来られる。

寛ちゃん。

御手紙有がたう。寒くて不景気な暮だ。僕は生れてからこんな不景気な暮を過した事がない。暮と云へば、ごまかし乍らも賑やかな街をぬって歩いたり、クリスマスの晩には「味覚生理学」までは行かなくとも、兎も角も七面鳥の料理位ひにはありついて来たのだが、此の暮と来たら、暮の冬眠のような退屈さだ。丸善の方は丸善の方で、三月には例の燕巢会だの、萬鉄五郎だの、曾宮一念だのと、おレキレキで日どりがいっぱい。そんな訳で僕の展覧会は、又々早まり、多分二月の二十二日から二十七日までやることになりそう。処で準備は急がなくてはならない。急がなくてはならない。で、明大晦までも木彫、木彫といふ始末だ。不景気は此の所為でもあり、此の為には不景気は寧ろ有がたいのかも知れない。

扱て、しつこいようだが、もう一度。泣き度い時には泣き、笑ひ度い時には笑ふのは、実に理想的です。けれども、私の考では、それを実行して居るのは、赤ン坊と赤ン坊からぬけ出したばかりの子供です。君は泣き度い時には泣き、笑ひ度い時には笑へればいいことを知って居るだけです。或はそう出来ればいいと思ふだけです。第一君は、僕の前で怒ったことさへありませんからね。僕の云ふ、人格の云云、おのづから云々は、此処を云ふのです。世阿弥の云ふ所の「時の花」を過ぎ「真の花」に到達し、そうして「凋れる」といふ所まで行くのが、芸術の極致であるにしても、「時の花」代の人間が「真の花」を真似、「真の花」代の者が「凋れた」ふりをする銜気は正に慎まれなければならないのだ。何故なら、それはつまりは贋物だからだ。おのづからなるものがないから、底に空虚が見え透いて滑稽になって了ふのだ。

それから、「こちらも自由であればよい」と君は云ふ。だから、僕には君がわからないのだ。何故なら君の作品は不自由な僕の作品より、更に不自由にしか僕には思へないからだ。以上簡単に。

処で全くだ。正月には三人巴に座して、華々しく馬鹿になって見度いものだ。では、いい年をとり給へ。

久功

三十一日

午後、石膏屋に支払ひにゆき、江波の処によって夕方帰ってくる。

昭和二年一月

三日

一日午後、鎌倉にゆき、今日午過ぎに帰ってくる。それから暫らくして、上原サンに行き、夕方帰る。

四日

元日からこっち、風がなくてめっきり暖かい。朝、八木君を尋ね。八木君の処で中食、関口サンと三人で新宿まで出、四谷で八木サンと別れ、関口サンと銀座に出、夕方帰る。留守に三沢と江波が尋ねてくれた由。

五日

朝、三沢を尋ね、昼食のかはりに新宿で三沢と簡単にお茶を飲んで江波を尋ねる。御酒を御馳走になり、花を引いて、八時頃辞して帰る。

六日

午後、遠山サンをお尋ねして、色々自分の展覧会の相談に乗って頂く。小城サンに寄って、夕方帰る。

七日

雨。夕方から上野の世界で、炬火の新年宴会があったので行ってくる。

〔欄外に記す〕  
〔炬火新年会〕

八日

雨霽れて、春のように暖かい風が静かに吹いてゐる。夕方から田辺サンに行く。久顕サンも自分より少し早く田辺サンに行き居た。一時に帰宅。

九日

曇って北風が吹いて、ひどく寒い。午前中、川路氏を尋ね、午後からは、炬火の集りがあった筈だが、出席せず、家に帰って来た。夜、本田サンが来られ、十二時まで話が賑ふ。

十日

曇, 寒。

十一日

雨, 寒。

十二日

晴, 時々曇。大分暖かい。

午後, 倉橋君が来てくれる。

十三日

なか〜暖かい。午後, ブロンズ屋に行く。ブロンズ屋では一つも出来て居ない。江波を尋ね, 川路氏の所に寄って夕方帰る。

十四日

晴, 曇, 午後, 丸善に大浦氏を尋ねたが, 病気で出勤して居ない, 神明町に倉沢の下宿を尋ねたが, まだ国から帰って居ない, 川路氏の所に寄って, 夕方帰って来る。留守に三沢が額縁をもって来てくれる。

十五日

晴, 曇。

夜, 久しぶりで築地に行く。ゴオゴリの検察官<sup>112)</sup>だ。久しい以前に面白く読んだゴオゴリの検察官だ。だが, 何となく物足りない。多分当時に於ける, 或は特殊な社会人に対する, あまりに一面的な風刺であり過ぎ, そして唯それだけであり過ぎるからだらう。そうしてそれだけであり過ぎるべく, あまりに長々しく, くだ〜しいからだらう。本当の意味での喜劇は, もっと悲劇でなければならない筈だ。云ひかへれば, もっと同情せらるべき喜劇でなければならない。これでは, 笑劇だ。チェエホフ的一幕物を見るがいい。チェエホフ的一幕物にはもっといい, 或はもっと気のきいた立派な喜劇がある。さもなければ思ひきって現代的な「ホオゼ」のようなもの——内容に於ても技巧に於ても——でなければ, われ〜には強く響いて来ない。

十六日 日曜日

晴。西風吹き荒んで

そうして私は木彫家になって五十日目で二度目の血の洗礼だ。

十八日

〇〇様

昨日は、どんよりと曇って居たのですが、思ひきって玉川<sup>113)</sup>まで出かけて、中井の良<sub>(良三郎)</sub>さんを尋ねました。相変らずパンツにスエータで働いて居ましたよ。

夕食がすんでから、十一時まで何と云ふことなくぼつ〜話して居ました。そして宿って了ひました。今朝は——明るい朝日が窓かけを透して射し込みました。良さんも七時には眼を覚ましました。それから寢床の中はほか〜と暖いものです。良さんと私はまた、床の中でたわいのないことを、昨晚のつづきのように話し合ひました。全くたわいのない事を飽きる事もなくぼつ〜喋って居るうちに、朝日はだんだんに明るくなってゆきました。八時半になってやっと床を出たのでした。それから、暖かい味噌汁で御飯を食べました。暖かい味噌汁、朝の味噌汁を、私はどれ程長く食べた事がなかったでせう。私の処では、朝は例外なくパンと紅茶、珈琲なのですからね。それから良さんと私は、外套をかぶって河原に出てみました。此の頃から朝日がだん〜薄くなって、東の方から真黒な雲が出て来ました。河原は冷たい風が止ままなく吹いて、身がしまりました。さて、河原では既に仕事がどん〜はこんで居ました。ジャリ取り——あっちに五人、こっちに三四人と云ふ風になって、或る者はモッコをかつぎ、或るものはジャリをふるって居ました。それから、河ではジャリ舟の空になったのが二艘三艘つながれて、下からつなで引かれて来ました、大きな平たい舟を一艘に一人か二人程の割合ひで引張って居ます。引手は浅い流れの早い水の中に、膝まで入ってちゃぼ〜上って行きました。向ふ岸では、堤を築く為に大きな機械がガラガラ動いて居ました。□□□空はどん〜暗くなってすひました。働らいて居る人々の子供達は、ムクムク着ふくらんで、ジャリの山に上ったりころんだりして遊んで居ます。十分とはたたないうちに、私達は寒くなって帰って来てしまひました。良さんと私は温室の中に入りしました。温室の中は眼鏡がくもる程温かく湿って居ました。ピースとシクラメンが盛んに咲いて居り、アスパラガスの葉が若々しくはびこって居ました。良さんと私は、扉の内側に寄りかかって何かかにか話したり、黙って花を見たりして居ました。あたりは全く曇ってすひました。馬鹿に静かです。全くいやに静かでした。静だな、静かだなと三度も四度も云ってるうちに、私は何だかすっかり悲しくなってすひました。あたりはいよ〜怪しげに暗くなってすひました。温室の中にピースが小さな赤や桃色の花をつけて、三列に行儀よく並んで居ました。シクラメンの花茎がぬく〜と立って居ました。アスパラガスの新しい葉が黄色いような緑に互へておました。温室の中はいやに静かでした。私は絶えて無く悲しくて仕様もなく、悲しくなってすひました。

十九日

晴。風だって寒い。

---

○今夜明るい月が蒼く寒々と窓の外に亘えてゐる

何故私はそれを見たのか

多分そこに泉のように絶えないロマンスが生れるからか

否、多分理由いはれもない運行の掟に

(自我は覚め、自我は覚めるけれど、目的は、目的は永遠にわからない)

みじめにも縛められた

それが月であるからか

主観と客観とがここに混沌として

□□□□□□□□□□□□□□□□□□

懷疑を超え動かない事実がここにある

□□□□□□□□□□□□□□□□□□

(観念と実体とをたった一つの現象がここにある)

□□□□□□□□□□□□□□□□□□

主観と客観とがここに混沌として

懷疑を超えて動かないたった一つの存在がここにある<sup>114)</sup>

二十日

晴。明日から大寒と云ふに、今日から一きわ寒くなった。

---

○今夜呆れた月が王者の虚威を以て窓の外に居る

何故私はそれを見たのか

恐らくは相対の浮沈に真価を捨て

恐らくは相互の關係に個有を忘れねばならない私に

(真価は何処にあるのか、個はあまりにも依り所ない抽象に似る)

あまりにも遠ひ

それが月であるからか

關係の中に居て關係を忘れ

相対に縁よりながら浮沈まみに塗れない王威の孤独が彼処にある<sup>115)</sup>

二十一日

晴，空ッ風が荒れて寒い。





帰ったら、江波から親展書が来て居る。展いて見たら、江波が四日の後二月二日に結婚するのだと、そしてお嫁さんは、清美サンだと。そこで早速江波には取敢へず、百萬のお目出度うと、百萬の万歳とを送る。

三十日 日曜日

田辺サンが来られる。

北風が荒れて、北風が荒れて、目茶苦茶に寒い。ラヂオは明日も亦北風が荒れて北風が荒れて、零下七八度になるだらうと報ずる。勝手に寒くなるがいい。私は巨燵（炬）の中にもぐりこんで、一歩だって外へなど出てやらないから。

---

○今夜すさまじい風の向ふに遅い月がおさまってゐる

何故私はそれを見たのか

多分大気は荒れ大気はゆらいでも

多分ゆらぐものは大気の中に左右するものばかりで

(大空の彼方に月は冷やかにおさまり、彼処では永遠の夢が立派な營養（榮）を提供する)

大空にゆらぎもしない大空にかかる

それが月であるからか

思想は乱れ思想はゆらいでも

大空の奥高く益々互えかへるたわいもない真理の概念が彼処にある<sup>119)</sup>

三十一日

晴。寒。

午後、ブロンズ屋に行ったが、何一つ出来て居ない。本郷で買物をして、銀座に出、夕方築地にゆき、ショウの「悪魔の弟子」<sup>120)</sup>を見てくる。処で、私の大好きなショウの、ショウのうちでもメロドラマ的な「悪魔の弟子」であるから、そうして演出は与志ちゃんのため、面白くない筈がない。そうして結構面白かった。にも拘らず、もっと面白くてもいいような気が何処かでするのは、ゼイタクだらうか。舞台は多少お粗末であったとは云へ、舞台に対しては、私は始めから別段の幻影も持って居なかつたのであるから、別段の不服もない。で、此の多少のゼイタクを望ませる原因は、役者であるらしい。丸山君のリチャード・ダッジョンは、いいだらう。岸さんのダッジョン夫人のあらへしさが、多少外面的過ぎはしないか。もっと内に憎々しさを感じさせてくれた方がいい。伊達君のクリスチーは、(これは非難ではないが)、ぜぜきたない馬鹿だったが、私はもう少し小ぎれいな、うすのろの方がいいと思ふ。エッシイの(客演)吉田日出子氏はよ

かったと思ふ。扱て、牧師から国民軍隊長に変る青山さんのアンダースンが、牧師のうちはよかったが、それから二幕の終りでの変るところもよかったが、最後の場への突入は、やっぱり何処か牧師らしくて、もっとがらりと変って、がむしゃらで快活であってほしかった。それからシュデイスの高橋さんがもっと、只綺麗で（これは六ヶしい注文だが）、これはもっと外面的に色気——この色気は所謂艶っぽい意味ではない——があった方がいいようだ。それから三浦洋平氏のバアゴイン將軍と小杉君のスキンドン少佐との間の皮肉は、もっともっと露骨にゆかないものだらうか。総じて私の予想よりも調子が低かったようである。目下役者の半数が旅に出て居るのだから、そして旅での出し物も与志ちゃんのものなのだから、尚更役者の不足があるのは尤もだが。とは云へ実の処、此の前の検察官等よりも、私一個は数等愉快を感じるものである。

## 二月

### 一日

晴，少しは暖かい。

夜，三沢を尋ねる。

### 二日

晴，昼前，中井の良サンが来てくれる。

### 三日

晴，

### 四日

曇天。

### 五日

朝起きると、どんよりと曇って、乾いた土にも屋根にも、薄白く霰が積んで居る。そうして、朝のパンを食べて居る間に、ちら〜と雪が降り出し、雪は烈しくなり、少しばかり風立った中に、さら〜ととけないで積んでゆく。

私は炬達<sup>〔籠〕</sup>をつくって、中で木を削り出すのである。そうして、昼までそうして木を削って黙りこくってゐるのだ。昼のパンを食べて外出。雪は既に二寸余も積んで居り、天気つづきの後に、常にもない寒さの後に、積んだ雪はさら〜と乾いて風がふく度に、木の葉から屋根から滑って飛ぶのである。

青山一丁目から又お屋敷町の雪景色を見ながら、近衛三聯隊<sup>121)</sup>に後藤<sup>122)</sup>を尋ねる。

面会所は寒いけれども、幾組かの面会人達の間には、暖かい息がかはされ、そうして私  
の後藤は、生菓子を八つペロりと食べてしまって、箱が空になったので止めたのである。  
四時に兵営を辞し、早く火の灯る頃、笹塚の昇さんの所にゆくと、寒い外から来る者には、  
むう〜と暖かいストーヴがそこにあり、昇さんは書物をしながら、宇多ちゃんは編物  
をしながら、後藤のこと、公園のこと、戦争のこと、官位のこと、更に数学と芸術のことと、  
とび〜に、ちぎれ〜に話しがつづれ、それから暖かい牛なべがつつかれ、そうして  
話しは絶えないのである。八時半に山口さんの所を辞して、途中、巴里を思はせるコー  
ヒー、ロンドンを思はせる紅茶の店でコーヒーを買ふと、気軽な主人から巴里を思はせ  
るコーヒーを二杯呼ばれて、九時が過ぎる。家に帰る時間である。

弟は今朝鎌倉に行ったし、兄は一昨日も帰らない、昨日も帰らないから、今日の雪に  
は帰るまい。家では母が一人で炬燵（ヒトコ）に足を暖めて、古雑誌を読みかへしてゐるだらう。

---

○私は雪の降る、雪の降る夜道を歩き

静かな街、ほのじろい街を吠える犬もない

私はしばし行き、やゝしばし行き

雪道は、雪道はひっそりとして

散る雪は、夜の雪は私になつかしい

街燈のまはりが明るく

柵の葉に柔らかい雪が積み

私はそこにゐる

私は何を待ち、私は何を望んだのか

美しいロマンス、雪の夜のロマンスが譬へ空っぽの手籠に似ようとも――

---

✓兵営の広場に来れば広場はひろし広場に雪は降りまさり見ゆ

✓雪降りて降りまさり見ゆる兵営の広場をかこむ営舎はさびし

✓兵営の面会所にて□□□□□□□□□□□□□□□□雪の午後火によりて待てば待ち  
遠みかも

✓雪の午後の兵営の面会所寒けれど呼ばれし兵らのそれ〜このにこやかさ

✓やゝありて古めく大き外套を纏ひ出で来し志願兵後藤は

✓雪の午後の面会室に語り語りうまげに菓子食ふ志願兵後藤は

✓菓子を食み食み語り語る面会所のひときを忘れし志願兵後藤は

✓林檎の実を皮ごとさきて食みはこぼす兵士もありき妹がみも見守りき

## 六日 日曜日

晴。雪の後の綺麗になった空に日が暖かかったので、夕方までにあらし雪は溶けて了った。朝、川路氏を一寸尋ね、遠山サンを尋ねたが、留守だったので小城に行き、四時まで子供達と遊んで夕方帰る。

## 七日

今夕より明朝にかけて 大正天皇御葬儀行はせらる。

晴。午後、三沢が来てくれ、夜まで遊んでゆく。

## 八日

晴。午後ブロンズ屋に行く。ブロンズ屋では、何にも出来て居やしない。全く何一つ出来て居やしないのだ。先月一ぱいだ、どうか今月の四日まで待ってくれ、ところで今日は八日で、今日は八日で十五日までにはみんな揃へて仕上げます、だ。ブロンズ屋の先生、君は約束の本質を知らないね。約束とは「動かない」ことなのだ。だが私はおこらないよ。私はめったにはおこらないよ。君の知ってる通り、今年の夏、君の約束が動いて、その為に私のものが展覧会に出品することも出来なかった時だって、それから九月が過ぎて十月十一月十二月一月、そうして今が二月であつたって、私はおこらないよ。君はそれをよく知ってゐるから、安心してゐるだらう？ 私は私で世間と衆人とを蔑んで居るから、決しておこったりはしないよ。最後まではね。おぼへて居ろ！ 私は最後にはおこるぞ、私がおこる時は「最後」なのだぞ、総べてが一どきに解決する時だぞ。

帰りに、東中野に川路氏を尋ねたが、留守なので、晩に再び尋ねる。私の展覧会の為の、どうもすばらしい序文が出来て居る。

## 九日

晴、午後、丸善に大浦氏を尋ねて種々打ち合はせをしたが、印刷はこっちでやってほしいとの事なので築地にゆき、松田に萬事たのんで、夕方小石川へ行く。

## 十日

曇、晴、寒さが昨日あたりから又々ぶり返してくる。朝、築地に木版の版板をとけて置いて、美術学校に三沢を尋ねたが、相憎くモデルが休んだので帰ってしまつて逢へないので、三時に再び築地にゆき、堀野氏に面会、彫刻の写真を撮つて貰ふようたのんで、夕方帰宅。

## 十一日

晴、寒。朝、渋谷に小山直彦を尋ねたが、留守だったので、青山六丁目まで歩いて、

本多正震を尋ねる。昼食を共にし、二時過ぎ、桜友会<sup>123)</sup>名簿を借りて帰ってくる。

#### 十二日

晴,寒。午後,築地にゆき,築地で展覧会のプログラムの校正刷を待ち,校正をすまして,帰り三沢を尋ねたが,留守で夕方帰ってくる。

#### 十三日 日曜日

朝,川路氏を尋ねる。

午後,堀野氏が来て話したり休んだり,電気をつけたり消したり,動かしたりして,夜までかかって,彫刻の写真を五枚とってくれる。

#### 十四日

晴。寒。

今日は晩,築地にプログラムが出来て来る筈だったので,マクベス<sup>124)</sup>を見ながら待って居た。劇場で久々に中北泰彦に逢った。それから成瀬日吉君に逢った。成瀬君とは七八年も逢はなかったと思ふ。だが成瀬君は其間に——例へば中北が此の三年の間にあっち側に行つて了つたように——こっち側に来て居た。と云ふのは,病身から今迄ぶらへして居て,そうして洋画を勉強して居たのだった。成瀬君とお茶を飲みながらぼつぼつ話して居るうちに,マクベスの方を一場二場見ないでしまつたりした。

扱て芝居ははねたけれども,何のことだ,ここにも約束の本質を知らない奴が出て来た。わかるか,プログラムは今日は出来て来ないのだ。

#### 十五日

午後,築地に行く。プログラムは出来て来ない。ヘッヘッ,出来ないのは事実なのだから仕方がないさ。丸ノ内に出,毎夕新聞社に田沢氏を尋ねる。それから丸善にゆく。それから,又々築地に行かなければならない。それから団子坂まで出てブロンズ屋にゆく。ところが,ブロンズ屋では三度でも四度でも,何一つ出来て居ないのだ。ヘッヘッ,出来て居ないのが本当なのだから,仕方がないさ。明後日はまちがひなくこちらからお届致しますだって……ヘッヘッ。ブロンズ屋で倉沢に逢ひ,お茶を飲んで暫らく話し,別れて江波を尋ねる。江波は風邪を引いて寝て居たが,逢つて暫らく話して,九時半に家に帰ってくる。

#### 十六日

雨。昨日,気味の悪いように生温かったので,凍てついて居た道が急に溶けた処へ,今日の雨でひどくなった道を,午後,えっちらおっちら目黒の遠山さんまで行った処,

お留守なので、小城サンで一時間程休んで帰り、三沢の処に一寸寄って夕方帰宅。

### 十七日

朝、丸善に行ったが、プログラムは千枚しか届いて居ない。其上、注文した紙と異って居るばかりか、活字の組方まで異って居る。なさけない位ひ出鱈目だ。封筒は全然とどいて居ない。築地に行ったが、築地には返事も来て居ない。だから、松屋で遅く昼飯を食べて出かけたが、あひにく今日は朝から私の大きらひな西風がビュービューうなあって、まるで帽子をおさへきりでなければ街は歩けないのだ。牛込の水道町をさがすのに、水道橋でおりたから大変だ。歩きにくい日より下駄をごろへさせて風に悩まされて、扱て飯田橋でつかまへた郵便屋は、出鱈目な道を教へてくれるから、築土八幡の方まで一まはりして、結局大曲に戻って、更に石切橋までも向ふに行つてからが、さてへわりなく<sup>〔路地〕</sup>露路の<sup>〔路地〕</sup>奥の方で、やっとみつけたが、へっへっ、何一つ出来ては居ないのだ。世間様何卒もう少し私にやさしくして下さい。

<sup>〔欄外に記す〕</sup>  
[怒り怒りあればあるものかな歪みしままに戻らぬ悔ひかな]

### 十八日

風烈しくて寒し。朝、江波の処に行く。それ見ろ、昨日一ぱいが今日になつても、ブロンズ屋はもつて来て居ない。丸善に電話をかける。よろしい、封筒は届いて居る。ブロンズ屋に行く。出来ても居ない。二つだけ目の前でいぶさせて、腹の中がむかへして持つて帰る。あとは、今晚七時にお届けしますだつて、勝手にし給へ。江波の処へ南兎が来て居て、江波の事をパパ、パパといふ。何だかしっくりしないで、可哀そうな気がする。

<sup>〔欄外に記す〕</sup>  
[男あり物に堪へゆがみ堪へゆがみ撥ッかへる日を自らおそる]

男あり自ら悟す心あはれ床に入る頃を堪へがてにせり]

### 十九日

雪でも降りそうに曇つて居る。朝、一寸川路さんの処に行つてくる。

<sup>〔欄外に記す〕</sup>  
[旧作 男アリ夜半ニ<sup>日サメテ</sup>覚メ出デテ闇ヲ這ヒ這ヒ勞レテハ明ケ眠リスル]

### 二十日 日曜日

曇日、寒。

入営中の後藤の為に、小さな慰安の会合を計画し、今日笹塚に集る。後藤と後藤の兄さんと良さんと惣ちゃんと自分と弟と、そうして主人役の昇さん夫妻に彦兄さんで、ビールで中食。自分は朝、江波から葉書で呼ばれて居たので、夕方、江波の処にまはる。三角が来て居て、三人で日本酒で夕食、それからウィスキーの多量。遅く十二時過ぎて

帰る。

#### 二十一日

曇, 小雪。倉沢が朝から来てくれ, 三角も午後から来てくれて, 荷造を手伝ってくれる。夕方荷造が済んでから, 三角の処にさそはれたが, 自分は一日気分がすぐれなかったので, 辞して風呂に入って薬を飲んで早く床に就く。

#### 二十二日

雪。大変な降り方である。自動車は八時になっても来ないので, 催促に行ったが, 九時前になっても来ないので, 又々催促に出たら, 高円寺の方から三角がやって来てくれた。自動車は九時半を過ぎて, 今日はどうしても車が出ないからと云って断はって来る。馬鹿な。こっちは今日も今日も, 朝のうちでなければいけないのだ。三角と駅まで出てトラックをさがしたがないので, 乗用自動車を一つつかまへてくる。荷物をつんで, 三角には電車で行ってもらって, 自分は荷物と一緒に丸善にゆく。倉沢が江波を誘って□沢山の荷物をもって来てくれる。三角もちきに来てくれる。久顕も来てくれる。惣ちゃんも来てくれる。皆で飾着けを急ぐ。堀野氏が写真をとどけてくれる。夕方前になって, 毎夕の田沢氏が来てくれる。良さんが来てくれる。倉沢と三角が飾着けを終へて帰ってから, 夕方皆でマーケットに行ったが, 雪で花が来て居ないので, 有楽町の花屋に行って花を買ひ——ひどい道だ, 実にひどい道だ——オデッサでビールを祝って八時過ぎに帰る。雪はやんだ。明日は天気だ。だが道は道はさぞわるく, 多分寒いだらう。茲五日の間, 天気が続いて, 寒い風が吹かないように!

会場には気の早いお客さんが, 幕を排して四五名見に来た。そして林謙三がいち早く見物に来る。

#### 二十三日

### 三月

#### 一日

私の展覧会の第一日, 先月の二十三日は雪の翌日の晴天だったが, 雪解けで道はぬかるんで風は寒かった。第二日も晴れてくれたが, 中野の道はまだひどくぬかるんで居た。第三日は朝から全く曇って居た上, 冷たい風に乗って雪がちら〜したりした。第四日の朝は, 残雪の上に新らしい雪が積んで居た。その上, 終日晴れもせずに曇って寒かった。第五日は, 同じように曇って, そして寒かった。五日間の間に, 千六百枚のプログラムが五六十枚残った。

毎日昼少し前頃から行って居たが、丁度いつでも一人位ひ知って居る人が来て居る程で、久しぶりに色々な人達に会った。六年会の連中では、小山直彦、甘露寺方房、本多正震、細川立暢、岡部長世、三島通隆、黒田孝雄、伊達十郎、其他、成瀬日吉君、加藤成之君などが来てくれた。美校の連中では、金沢庸治、木内五郎、服部仁三郎、安達貫一、小室達、荒居の徳サン、三沢寛、村田勝四郎、花里金英、炬火では、川路氏と山崎泰雄、都築益世君等が来てくれたが、山崎君と都築君とは、私の小さな彫刻を買ってくれた。

其他、大江安之介先生が来て下さったし、田中の戌チャン、大内青圃君、片山敏彦君。それから、江波兄弟と中井兄弟、いそ子、すみ子。それから、田辺の英さんが買ってくれたので、恐縮してゐる。それから、松岡正雄が来て、久しぶりで長いこと話して行った。伊藤熹朔と千田是也も来た。批評家では、金井紫雪氏と坂井犀水氏に紹介された。うちちゃんも来てくれたし、佑サン夫妻も景気を見に来た。

二日目の夕方、川路氏から紹介されて、金子九平次<sup>125)</sup>君が会場に訪ねてくれた。帰にお茶を飲んで一時間も話したが、最後の日にも夕方前訪ねてくれたので、又お茶を飲んで、いつの間にか三時間も話して別れた。

二十八日はよく晴れた。九時に丸善に行ったら、ぢきに惣ちゃんが来てくれた。それから暫らくして、倉沢と江波が来てくれた。皆に手伝ってもらって、ばた〜と荷造りをすませ、お茶を飲んで居る間に、自動車が来た。二台の自動車で荷物と一緒に皆にも来てもらって、荷物を家にほほり込んで貰って、皆で東中野に乾杯をしに行った。だがそれが祝成功か、慰労かはまだ〜先になってみないとわからない。暗くなるまで飲んでパーを出たら、江波が来てくれと云ふので、お茶の水で惣ちゃんと倉沢に別れて道々話しながら、江波の処に行った。玄関まで行って、清美サンが栄子さん達の処に行って居る事がわかったので、直ぐに引返して歩いて上富士前まで行った。道々江波は話しつつ、私は聞きつけて、九時頃、栄子さんの処に行った。はじめ清美さんに逢ひ、それから下で栄子さんと照子さんに逢った。十二時に近く辞して帰ってくる。

翌日、今日午後気になったので、江波を訪ねたのが三時だった。そして少しばかり遅過ぎたかも知れなかった。けれども亦、そんなに遅過ぎもしなかったらしい。江波のお母様と知治さんとにもゆっくり話した。晩の御飯を江波の処で済ませて、暫らくしたら、栄子さんが来た。私はぢきに九時半に辞して帰る。

## 二日

晴。昼前一寸江波を尋ね、午後、田辺サンにゆき、晩九時過ぎて帰る。

## 三日

曇って北風が吹いて大変に寒かったので、私は頭がびん〜して体がぎごちない。で何処にも出ないで炬達<sup>〔籠〕</sup>に入ってるた。夜は風呂に入って薬を吹<sup>〔飲〕</sup>んで早く寝たのだが、



十一時半に起きなければならなかった。母がぜんそくの発作を起したのだ。母は多少前からぜんそくの気があったのだが、丁度一週間程前、私の展覧会の最初の日に、二十三日の午前一時だから、本当は二十二日の晩と云っていいのだが、最初の烈しいぜんそくの発作を起した。丁度、終日降り続いた雪が積って、雪の上を吹く風が馬鹿に冷たかった。そして私と弟とが床に就いたのは、明方の四時を過ぎた頃だった。それから丁度五日の間、私の展覧会の期日の間、母は寝て居た。そして二十八日に兎も角も床を上げた。そして今朝は寒い風の中を外出したりした。そしてそれがいけなかったらしい。十二時半頃に医者に来て、注射をしたりして行った。医者のお勧めで、弟が高円寺まで行って、酸素を取って来てくれた。

私はひどく寒けがしたので、母がおちつくと間もなく、また床に入った。

#### 五日

雪。又雪だ。雪が降って積って居る。

昨日は午□□□□□□□□□□過ぎ、丸善に行き、ブロンズ屋にゆき、神田にまはって、八時頃帰って来たら、夕方母が又発作をおこして少し前おさまった所で、佑サン夫妻が来て居た。寒かったのだ。そしたら、又雪だ。そして、今日は又、雪の翌日の曇日だ。何ていやらしい曇日だ。

#### 六日

昨日は七時半に床に就いた。そして、今朝と云っても夜中の十二時に、久頭が起しに来た。そこで久頭と換って母の病室に入る。母の室が六十度<sup>126)</sup>に保たれなければならないからだ。

#### 七日

(松村磯子)  
いそちゃん。

一昨日は一日家に居ましたよ。そうして晩七時過ぎに床に入りましたよ。それから、夜中の十二時に起きて顔を洗って、朝までに手紙を七つ書きました。それから昨日も一日家に居ましたよ。昨晚も七時半には寝て了って、夜中の十二時に起きましたよ。そうして今、昭和第二年の三月七日の午前四時半です。あなたは今寝て居ます。寝て居る筈です。私は此の通り、あなたに手紙を書いて居ます。何故だか、たった一言で説明して上げますよ。私のママが病気なのです。ママはさっきからよく寝て居ますが、それは私が起きて居るからなので、私は別段の用事はないのですが、私は又時々寒暖計を見なければならぬのです。そうして寒暖計が六十度に昇って居れば、私の役目は完全に果たされてある訳なのです。わかりましたか？ わかったら次ぎ！

こないだは寒いにお出かけ下さって有りがたうよ。大変に失敬しちゃいました。ど

うも長ったらしいメンカイニンなんかがあったものですから。トコロデ、あなたはあの展覧会で何んな風に思ひましたか、お爺さんはお爺さんの手紙のように、訳のわからないものを作って独りで喜んで居るんだわ。そんな風に思ひましたか。どうも初めから変ってると思ったけれど、だん—だん—見てゐると、まあ何て何もかも変ってるのだらう！ そんな風に思ひましたか。一体お爺さんは何を考へてるのだらう、芸術って云ふものは人を引つけなければならぬのだわ、それだのにここに並んでゐるものは、まあなんて気まぐれで、たわいがないのだらう？ そんな風に思ひましたか。芸術家と芸術品とは、そうよベートヴェンの肖像のように、人生をにらみつけ、それから人をもにらみつけなければならぬんだわ、それだのに、ここでは皆がげらげら馬鹿のように笑ってるぢやないの！ そんな風に思ひましたか。芸術ってものは、絶体<sup>【対】</sup>に真面目で神聖なものだわ、だのにここではあんまりやりっぱなしだわ、だのにここではあんまり茶気があり過ぎるわ、だのにそこでは、愛のような暖かさのかほりに、他人のような冷たさがあるばかりだわ、だのにそこでは、涙のような柔らかい快さのかほりに、針のように痛い皮肉があるばかりだわ、ここでは懐かしい天使の微笑のかほりに、いやらしい悪魔のくす—笑ひがあるわ、洗練された慎ましさのかほりに、野蛮な我無シャラがあるばかりだわ、真面目で深刻な人生のかほりに、DADA ヅ子のような不躰な感覚があるばかりだわ、何だかわからないけれど、アルコール的なものがあるのよ、そうよ、何やらアルコール的なものがあるんだわ、それが人の咽をしめつけ、人の胸を刺すんだわ。そんな風に思ひましたか。兎も角どんな風だったか云って下さい。

それから少しまへ、ママがおきて了ったのです。だから今日はこれで失敬。

高円寺老

---

晴、春が目の前に見えて来たような日、昨晚も七時半に床に就いて、今朝と云っても、夜中の十二時に起きた。それから午後、ぶら—郵便局まで行ってくる。三時に平井文雄博士が来て下さる。母の病気は今の処たいした事もなく、気管支性のぜんそくといふより以上のものではないと。だが、家の中はごったかへして居る。そして、私は展覧会前からの疲れが出て来て、此の二三日の寝不足の為に体が熱っぽいようだ。だが本当は、それ以上に私は不機嫌なのである。だが又皆は只々私が体を今こわさないようにとのみ心配して、早く寝かしてくれる。だから、私は弁解も説明も要らない、夕方六時に熱さましを飲んで寝て了ふ。

八日

晴。曇、小雨、四時半起床。終日マゴマゴして、夕方六時に寝てしまふ。

## 九日

四時半起床。明方は本降りの雨だ。風が出た。南風のむふむうする奴があばれまはり、なぐりつけるような雨だ。空は暗くて家の中は湿っぽい。あひかはらず終日マゴマゴして居る。すばらしい休養だ。馬鹿げた無為だ。時間がない。自分の時間といふものが一分もない。夜、雨は止んだ。風はまだ止みきらない。

---

### ○やくざな馬が三匹居た

一匹の馬は死んだように眠り続けた  
「動いたところで仕方がない」  
そうして死んだように眠り乍ら死んで行った  
次の馬は風のように駆け続けた  
「何処かに行きつくにちがひない」  
そうしてまだ――生きて居るつもりで死んで行った  
第三の馬は「何者かの前」に踊り続けた  
(後脚で立ち、前脚でひざまづき  
頭を振り尻を巻いた)  
「天国の酬ひは俺のものだ」  
そうして立派に報酬を信じ乍ら死んで行った  
三匹の馬の骸は同じように腐って行った  
さて三匹の馬の霊の行方を  
尋ねあてたい人間の願望です

## 十日

晴。今朝方三時に久顕とかはって、床に就くまで雨は止まなかったが、七時に起きた時、日本晴れの晴れやかな日が輝き、空は青くてまだ霞もなく爽やかな朝が、近頃珍しい。けれども私は家に居り、一日家に居てマゴマゴして居る。久しく何もしないので、あんまり何もしないので、頭は馬鹿のようになって了って、いつ前のような頭が取り返せるかわからない。そうして日が暮れると、ぢきに寝て了ふ。

## 十一日

風が。終日裂くような風が吹き通して、街は冷たい。だが硝子戸に差す日の光とのぞみ見る空には、あらそはれない春の柔らかい紫の影がある。

昼間、英子サンをたのんでおいて、九時半には家を出、丸善にゆき、一時間もたつて九十八円ながしを貰って、団子坂のブロンズ屋に行って払ひをし、神明町に倉沢を尋

ね、一時間半ばかり居て、江波を尋ね、ここでも一時間程居て、日暮前家に帰ってくる。

- 
- 四角い壺と三角の鍋とがあった  
 何故か人々は四角い壺を好んだ  
 何故だかは決してわからない  
 それは全く決してわからないが  
 私には一つのことがはっきりと解った  
 それ□□故に——  
 それ故に私は三角の鍋を愛する……
- 

- 原っぱに出た  
 霏々として雪が降り積んでゐる  
 あゝ雪片  
 百  
 千  
 百萬  
 もっとだ  
 いいや、もっと、もっと、もっと  
 私は泣き出したくなった  
 「無限」は私の不安をほほゑみにかへるに  
 あんまり遠くてあんまりたわいがない□□

十二日

- 椎の木に  
 はじめの春の日影さし  
 風  
 風稍にあらけれど  
 ここ、硝子戸の中に  
 ゆりかふ影はむらさき  
 うちあふぐ空はあさく澄む  
 椎の葉の葉摺れの音と  
 へやぬち  
 室内に母がけはひと

ここ、硝子戸の中に  
愛  
かなし、かなし  
かごぬち  
籠内に小鳥遊ぶを……

晴れやかな晴日、昼頃音枝が来る。それで、明日からずっと来てくれる事になる。  
晩、英子サンの処にお風呂を貰ひにゆく。外は頭の天辺に半月があり、半月はぼーっとふやけて、大きな月の輪を画いてゐる。明日は雨だらう。  
今朝は三時から起きたので、晩は九時半に床に入る。

十三日 〔欄外に記す〕  
〔日曜〕

五時過ぎに起きたら、雪が降って居た。やっと屋根の上が白くなった位ひ積って居た。雪は本降りになり、霏々として降り、風さへ吹き出して、夕方まで降って、六七寸かそこらも積った。午後、音枝が来てくれたので、雪の降ってゐる間に出ようと思った。四時半前に家を出た。雪は盛に降ってゐた。新宿に出て、市内電車に乗った。だが車庫前で、既に何台か停って居る前の車に乗りかへなければならなかった。更に四谷見附でも、ずっと前の電車に乗り換へねばならなかった。そしてもう一辺、三宅坂で長いこと待った上、青山から来た電車に乗りかへねばならなかった。そうして六時に築地についた。今日は築地に行っても芝居を見るつもりはなかったのだが、〔土方与志〕丁度与ッちゃんが外へ出かけた処だったので、暫らく待ち乍ら芝居を見た。与ッちゃんが帰って来なかったので、「桜の園」<sup>127)</sup>を終ひまで見た。外へ出たら雪は止んで居たので銀座に出たが、道は自動車にふみにじられ、裂しく降って積んだあとでもさすがに春先の雪で、水ぐんでじゃぶ〜して、とけた水は流れないで、道のどこにでも溜って冷たくじゃぶじゃぶした。そして私の靴には穴があいてるから、遠慮なく冷たい水が靴下にじっとりしみて、新しい水溜りに落ちる度に、素足で雪水の中を行くようにちん〜した。お茶を飲んで電車に乗ったのだが、ぼんやりして乗り過ごしてゐると、又三宅坂で動かなくなった。前の車が脱線してゐて、今度は上りだから、動き出すにしてもいつの事かわからない。車掌や運転手達だっていや気がさしてるから、益々はかどらない。で仕方がない、まあ、しまった事をしたと思って、逆の電車を長いこと待った。そうして日比谷に引かへし、有楽町から省線で帰ったら、十二時過ぎて居た。それから三時まで起きてゐる。一体私は雨と道のわるいのとが大ききらひだから、雪は降ってゐ間はすきだ。〔る脱力〕でも、明日は止んで道がわるくなると直ぐ思ふ。で、出れば寒いのだが、雪が降ると外へ出かけ度くなる。出ても雪景色を大いに賞揚するでもなく、寒い寒いと思ふのだが、家にじっとして居ると、物足りない気がして出たいのだ。

「桜の園」はよかった。私はチェエホフのものはどうも好きだ。私がチェエホフのも

のを好くのは不思議なようだけれども、どうも好きなのだから仕方がない。三人姉妹も好きだし、ワーニャ叔父も好きだし、それから沢山の面白い一幕物も好きだ。「能」<sup>(熊)</sup>「心にもなき悲劇役者」「犬——結婚申込」「紀年祭」「歌ひ女」「路を辿りて」。尤も「ワーニャ叔父」は暗過ぎるし、それに「かもめ」はどうもよくない印象を持って居るけれども。

一体どこが好きなのだ。私は甘いものと来たら、大がいはすなほに受け入れない性分なのだ。かと云って、ラーネフスカヤ夫人とガアエフとに、亡びゆく地主階級の没落に対する感傷を感ずるでもなく、ロバーアヒンに新しい資本家階級の産れ出る力を見出して感奮するでもなく、さらばと云って、アーニアとトロフィイモフに、未来に来るべき「合理的社会」の象徴を得て楽観勇進する訳にも到底行かないのだ。

ならば一体どこがいいのだ。仕方がない。やっぱりそこに漲って居る感傷がいいのだ。人間味がいいのだ。人物が好きなのだ。それから場面が好きなのだ。ラーネフスカヤ夫人とガアエフとが如何に非合理的だって、好きになれない人があるだらうか。ワーリヤがいかにか退屈な女だって、そして意気地のない女だって、好きになれない人が居るだらうか。ピーシチクがエピソードが、いかにたわいのない子供ぢみた馬鹿みたいな人間だって、好きになれない人が居るだらうか。同じように、「子供部屋」「野外」「広間」出発離別が好きになれない人が居るだらうか。根本的な理由が、即ちここにあるのだ——チェエホフの芝居を見て居ると、どんな人でも批評家にはなれないで、いつでも観賞者になってしまうのだ。

#### 十四日

八時に起きたら、明るく日が輝いて居たが、間もなくどんよりと曇って重くて、頭が痛くて殆ど堪えられない。午後、田辺の国サンが代数の問題を持って来た。十年ぶりのxyだ。夜になって、積んだ雪の上に雨が降り出した。馬鹿々々しい。十時前就寝。

#### 十五日

三時過ぎ起床。細かい雨が終日降り続いて、積雪を根気よくとがしてゐる。昨夜、築地から電報を貰って居たので、午後四時頃から築地にゆく。道が悪くて、道が悪くていやになる。築地では青山サンから、今度の谷崎潤一郎氏の法成寺物語の舞台に出す仏像に就いてのたのまれもの。高橋の邦さんと銀座に出、お茶を飲んで別れ、十一時前家に帰る。雨は止んだが、まだ——雲は多い。

#### 十六日

昨夜は十二時に寝て、今朝は八時までも寝て居たので、大分楽だ。終日どんよりと曇って、頭の中がぼんやりして居る。午後三時半に家を出、築地に行き、青山氏の処まで仏像のデザインを届けて置く。八時半に帰り、久しぶりでゆっくりラヂオを聞いて居た。

新交響楽団のベートーヴェンの英雄シンフォニーを聞いたが、これは又ベートーヴェンの作と云ふには、あまりだら〜して力がない。第一楽章のアレグロからがくだらなくて、だら〜と長いばかり、第二楽章のアンダンテアッサイはいいテーマだと思ったが、聞いて居るうちに同じように長ったらしく、第三楽章の諧謔調さへ面白くもなく、最後のアレグロさへが、如何にも力ない。力なく長ったらしい。十一時就寝。

#### 十七日

曇日。三時半に起き、昼前、何にも出来ない、午からも何にも出来ない。弟も遅く帰って寝たし、兄は相かはらず帰らない。だから私は、夜中寝ない。

#### 十八日

晴れ。久々のいい晴日だ。昨晚から引続き朝の九時まで起きて居たが、皆が起きたので、それから午後一時まで寝る。風呂を浴びて三時に外出。目黒に遠山五郎氏をお尋ねし、小城<sup>[ママ]</sup>に行つて、夜十時前帰宅。十二時寝に就く。

#### 十九日

曇。雨。五時過ぎ起床。どんよりと曇つて居たが、ちきにはばらばらと雨が降り出し、間もなく止んで又降つて、夕暮前から本気<sup>[に脱カ]</sup>なつて降り出した。どうも梅雨時のように天気が悪いので、いやになる。夜はあひ変わらずおきて居る。そして本当の所は今二十日の午前四時前である。

---

今や真夜中の三時を過ぎて  
私は起きてここに机についてゐる  
私の室に薄暗い電燈が一つ  
薄物の影に薄暗く灯つてゐる  
外の夜は雨で——三月の夜の雨である  
電燈の下にヒヤシンスの鉢があり  
ヒヤシンスの花は白くてかたくて  
青白くしっかりとかたまり合つてゐる  
電燈の下に又紫檀の蛇がゐる  
蛇はまっすぐに——まっすぐに<sup>こわば</sup>強張り伸び  
二つの金の目が頭上に上向いてゐる  
今私の前に  
青白いヒヤシンスと紫檀の蛇とは

真夜、薄暗い机の隅に

永遠の相闘を予覚する

(逃れられない!)

所詮和解を欠いた二つの性格である

二つの性格は決して和解しないように

二つの理解は決して両立しない故に

或る時、蛇は私を左右に支配し

或る時、蒼白い躊躇が私に憑く

(逃れられない!)

今や私の前に

感情の澁刺たる現実死し

思想の深秘が静かに息づいて居るけれども

やがて死したるものは甦るであらう

やがて二つのものの対立が始まり

やがて二つの性格は互に相うつであらう

やがて一つのもものが打勝つ時は

やがて他のものの終りでなければならない

(而も決して逃れられない!)

□□□□□□□□□□□□□□□□

而もやがて死したるものは更に甦るであらう

永遠の相闘は「永遠」への唯一の過程となるであらう

真夜中の三時をここに守るものは

薄暗い室の片隅に薄暗い光であり

四壁の外はなまぬるい三月の夜の雨である

二十日 日曜日

ずっと起きて居たら、四時半過ぎて久顕が起きて来たので、自分は五時に寝る。十一時に起きると、夜来の雨は益々降って居り、大粒な牡丹雪をさへ交へはじめる。暫らくのうちに雨は全く雪に変わって、どん／＼降って積もり出す。そして、日暮過ぎまで降って居る。

二十一日

晴れは晴れたが、そうして日差しは春めいて来たが、まだ／＼風は北で冷え／＼と寒い。昨夜は早く九時前に寝たが、今朝は三時半に久顕が起しに来る。朝九時に家を出、一寸江波を尋ね、上野に中央美術の展覧会を見にゆく。日本画、洋画とひどく沢山ある



ので、極くざっと一まはり見る。みんななか——うまいし、帝展などちがって、余程勝手な事をやって居るので気楽でいい。

絵の下に番号だけしかないので、一々名前を注意しなかったが、中村顕太郎氏の静物、鬚光氏の静物など好きだった。それからヴィルドラックから送って来たフランス美術が三室あった、其のうち一室は、稍古い人々、コローだの、クールベーだの、ルノアールだの、レピンだのといふ人々のが集められて居る。あとはおなじみのマルケ、ラブラード、デュフィ、ローランサン、フリエズ、オットマン、マチス、ロッシユ、ブラック、ドラン等であるが、只一枚ルオーの「母と子」はすばらしくいい。私は金さへあったら、どんなに高価でも買っていいと思ふ。ルオーの「母と子」はすばらしくいい。会場で宮田に逢ふ。宮田と広小路でわかれて、一時半過ぎに日本青年会館に岩村の公演を見にゆく。二時に久顕もやってくる。

帰りに新宿で降りてぶら——歩いてゆくと、向ふから市野信治が小さい赤チャンをだいて、夫人と話しながらぶら——やってくる。北大路！ って私が呼んだもんだから、びっくりしてやって来た。暫らく立話してわかれ、私は東中野でおいて川路氏を尋ねて、夕方帰宅。今夜もずっと起きて居る。

## 二十二日

快晴。風南に変わり、暑い程暖かい。

夜明前、三時過ぎに庭の方の硝子戸が開いて兄が帰って来たらしく、音枝とむかふでぼつ——話してゐるのが聞えたが——私は十五分ばかりして、久顕を起こして寝て了ふ。目がさめたら馬鹿に明るいので、びっくりして起きて了ったら、まだ七時だった。兄は音枝の所で寝て居た。音枝の話では、兄は昨夜十一時過ぎに帰って来たのだが、あんな時間まで外に立って居たのだそうで、それから音枝が何か云つても、只々さめざめと泣くばかりなので、兎も角も寝かせたのだそうである。私は兄が永い間の放任な散漫な生活の重荷の為に、ひどい極端な神経衰弱になって了つたのだと思ふ。そうして反省と悔恨を匡正の意志とも拘らず、脅迫観念的な惰性が、容赦もなく兄を現在から脱けさせないのだと思ふ。まことに気の毒であるが、どうすることも出来ない。

午後、池尻の東洋金網へ行ってくる。兄は、午後に起きてからも、母の前に只々さめざめと泣くばかりだったそうである。晩、中井の良サンが来られ、武サンもやって来たが、私はあまり勞れて居たので別室で横になって居たが、いつか寝てしまつて、十一時に目をさました時は、中井さんも、武サンも帰って居なかった。十二時床に入る。

## 二十三日

快晴。朝四時起床。十時十八分の汽車で鎌倉にゆく。鎌倉では道隆が未だにはっきりとしないで居る。

横須賀から電話で、昌生叔父様は夕食に帰られないとの事だったが、十一時まで待っても帰られないので、寝てしまふ。

夕食前、昌道をつれて散歩、材木座の海に出、涯のハナをまはって、小壺〔坪〕の入口まで行ってみる。海は馬鹿におだやかで、浜には大分人影がある。

#### 二十四日

朝から晩まで暗く曇って居る。朝一時間程叔父様にお逢ひし、午後三時一分の汽車で帰京。

#### 二十五日

暗く重たく曇ってゐたが、夕方にはとうとう雨になる。

#### 二十六日

昨夜は寝ないでしまふ。それから、朝から晩まで雨だ。真暗だ。朝八時に寝て午に起きると真暗で、頭がいやに重たく、眠むくはないけれども、身体が疲れきってゐる。頭も空っぽになって了って、まとまりがない。

雨は晩まで降りつづけ、昼中真暗だ。で、晩は九時に寝てしまふ。

#### 〔ママ〕 二十六日

夜寝なかつたり、昼間寝たりするので、頭が散漫ではじめがつかない。昨日の日記は半分昨日で、半分は一昨日なのだ。二十四日の晩が寝ないので、二十五日の晩が九時に寝たので、終日雨が降ったのは、今日なのだ。

で、今日は、朝から雨が降って真暗で、頭ががんーいたいから、すべての計画をほっぽり抛げて終日家に居て——昨晚は早く寝て、今日は六時に起きたから、今晚はまだ寝ないのだ。で今晚と云ってゐる今が、実は明日の——と云っては変だ。二十七日の午前二時半なのである。岩のようにガンジョウな人でも、この位ひ寝たり起きたりが出鱈目で、仕事らしい仕事が出来ないと、腰が痛くなったり、脛がだるくなったり、頭がとりとめもない夢を見たりするのだ。其の上、私は決して岩のようにガンジョウぢゃないのだから……へっ！

#### 二十七日 日曜日

昼前に三沢を尋ね、銀座で簡単に昼食をすませて、珍らしい春の日差の中をぶらぶら歩いて三越〔玩〕にゆき、ラリルレロ頑具の展覧会を見、またぶらー歩いて中洲に荒居の徳サンを尋ねる。

二十八日

晴。昨日は風がひどかったが、今日は静かで、まことに春らしい。軽い心で縁の下から花鉢をほり出してやる。先日中のひどい寒さの為に、縁の下にいけて置いた鉢まで、いくつか凍ってわれてるので、丁寧に植糸かへてやったり、よごれた木札を書きかへてやったり、小さな花壇を掘りかへして、桜草の根分けをしてやったり、グラジオラスの球を植糸かへてやったり、花壇が綺麗になると、小さな庭が大変にきたなくなっているのが見え出して、萌えはじめた草をぬいて綺麗に掃いてやったりして、まる半日つぶれる。早く夕食をすませて、大黒印刷所に七時に着いたが、誰も来て居ないので小山の処を尋ね、久々でゆっくり九時までもはなしこんで、再び大黒印刷所に行ったら、みんな来て居た。十一時過ぎに発送を済ませて遅く帰る。

二十九日

晴。午後、浅草の藤浪に行って「法成寺物語」<sup>128)</sup>の仏像を見てくる。それから築地にまはり、青山サンに会って夕方帰る。

三十日

朝から曇って風が烈しい。早昼で出て金網会社に行き、一時過ぎ築地に行ったが、例によってすべてがきっちりと運ばない。結局夜の九時まで居て、明日朝又行く事にして帰ってくる。夕方から雨になる。

三十一日

晴。九時過ぎに築地にゆく約束だったが、少しおくれて十時前に築地にゆく。けれどもそれでもまだ早過ぎたので、<sup>幕の</sup>□□□舞台稽古の合間合間に色つけをして、結局夜の九時まで劇場に居る。

四月

二日

晴。午後、ブロンズ屋に行く。ブロンズ屋では、相変わらず出来て居ない。新しいものを更に二つ置いてくる。動坂の松平に一寸ゆき、田端に倉沢を尋ね、一緒に神田に出る。夕方から倉沢とビールを飲み、久々にたがをはづして飲み、浅草まで脱線、遅く帰る。

三日

晴。母はすっかりよくなって、家の中も落ち着いたので、何かかにか初めたいのだが、三月一ぱいを何一つしないでぶかへして過ごしたので、頭は此の通り馬鹿になって居

る。根気は此の通り失せ——だから、私はぼつぼつ勉強の癖をつけようと思って、こうやってじっと机についてゐる。だが何一つまとまった事をする訳ではない。

私が丹精した<sup>チューリップ</sup>□□□□□□ヒヤシンスは、今日<sup>〔見〕</sup>美事に咲いた。ラッパ水仙も今日一日で大きな花を開いた。チューリップもぼつぼつ蕾が見えて来た。アネモネも遠からず花をもつだらう。

#### 四日

真暗な曇日だったが、午後からとうとう細かい春雨がけぶり、夜になって本降りに降り出した。終日家に居ても、ろくな事は出来やしない。

#### 五日

雨はまだ——続き、西北の風が寒いので、元気がなくなってしまう。日暮前になって晴れて黄色い日が照ったが、夜中の十二時には、又雨がしょぼ——降ってゐる。

#### 六日

雨はまだまだ続き、時たま止みはするが、晩まで止みはしない。西北の風が寒く

#### 七日

極めてなさけない暗い空であるけれども、雨は止んだのである。処で朝のうち日本橋の丸善に行って大浦氏に面会し、神田にまはる。神田で岡田に会って、しばらく其辺をぶら——歩いたが、とうとう又雨がやって来た。二時に中野の駅に着いたら、三沢がぼんやりして居た。うちに来てくれて、すっぱかされて、今帰る所との事だったので、も一度一緒に来て貰ふ。

昨日宮田から手紙で、勝ちゃんの試験がまたいけなかったから、逢ひ度い旨を云って来たので、夕食後上原サンに行ってくる。雨は降ったり止んだりしてゐる。

#### 八日

快晴。誠に誠に陽春四月である。

午後、笹塚に昇<sup>〔山口〕</sup>サンを尋ねる。昇さんの処でもひとしく陽春四月を楽しんでゐる。庭は堀<sup>〔堀〕</sup>りかへされて花壇が造られ、宇多チャンもお父様も皆が皆庭に出て土を運び苗をおろし、水をまいてゐる。夕食を御馳走になって、九時に帰る。

#### 九日

晴。午後、村野氏の処に「炬火」の啄人啄語に出席、十時に帰る。

十日 日曜日

晴。午後四時頃から上原サンに行き、勝チャンと二人夕食を早めに食べて、宮田の所にゆく。夜、丁度帰る頃から、雨がザンザン降ってくる。

十一日

曇。小雨。寒い。

十二日

天気予報は小雨と報じたが、有がたい事に今日は晴れで、其上五月のような日差しだ、だが又決して暖くはなくて、寧ろ冷え冷えと寒いのだ、だが又雨ではないから、気持よく何でも片っぱしから片づけて行き度い晴々しさだ。

十三日

曇一つなく美しい日であるけれども、気まぐれに寒いのだ。冬のように寒いのだ。

十四日

曇、真暗で、午後から極しみたれた雨が降り出して、二月のように寒く、まるで二月のように寒い。

十五日

真暗で、朝からしみつたれた雨が降って、二月のように寒く、まるで二月のように寒い！

十六日

昨夜から風が荒れたので、今日は明るい日が輝いた。だが、北風は止まないで——午後三時、久頭サンと一緒に上原サンにゆき——咲いたばかりの桜が雨で一度に散ってしまって、今度はそここの八重桜が若々しくふくらんでゐる——上原サンでは、縁先に腰かけて皆と明るい馬鹿話をして、日暮前に勝チャンを引張り出して、高勇吉の音楽会にゆく。帰りに銀座を歩いたが、北風は止まないで、気軽な散歩のつもりで出たのが、がた〜とふるへるように寒い。おほろなものは何一つなく空が亘へ、月が亘へ、北風が亘へ、足音が亘へ、そうして私達の肌と腹の中と頭の中まで亘へかへってゐる！

高の独奏会は報知講堂であったので、更科でソバを食べてゆく。扨て、高の演奏会はあんまりよくない。相変らずテクニカルなものばかりで、其上演奏其物もテクニック其自身〔ツ服カ〕の興味ばかりで、曲目の選び方もそんなものばかりで、申訳にダヴィドフのロマンス、クレンゲルの子守唄があったにした処で、演奏振りは一本調子で色がなくて、綾がなく

て、匂ひがなく、味がなくて——だがテクニックも完全に征服される時には、何やら同じ効果と呼ぶものなのに、指はよく動き、弓は達者に走るのに、音がぬけたり、ツブがそろはなかったり、ガサツなくせに——ガサツなのはかまはない、思ひきったクルードな熱とか感情とかがつっぱしるか、驚くべき確かさが要所要所を小気味よく引しめるならば——何処かに不確かさが感じられ、ガサツはもっと悪い意味に堕ちて、ゾンザイとか不注意とか……自己批判的なものを欠いて居る。曲目は

- |   |                             |              |
|---|-----------------------------|--------------|
| 1 | ソナタ (イ) 長調                  | ボッケリニ        |
| 2 | コンチェルト (短楽章)                | ダルベア         |
| 4 | ロマンス                        | ダヴィドフ        |
|   | 泉のほとり                       | ダヴィドフ        |
|   | 子守唄                         | クレンゲル        |
|   | タランテラ                       | ヴァッティ        |
| 5 | ロシア民謡に抛れる変装曲 <sup>[奏]</sup> | タヴィドフ (op.7) |

それに賛助出演で、立松房子氏がシューベルトとウォルフの明るいうりードを四つ、前者の「郵便」「何処へ行く」、後者の「ねづみおとし」「園丁」。

私は一体、細やかなセンチメントには引かれない方なので——そんな意味で私は日本の音楽家達から、あんまり主情的な小曲風なものばかり聞かされ過ぎて、タンノウしてゐるから、そして其の意味を悪い方に——大物を手がけるにはテクニックが足りな過ぎる事に帰して居るから、寧ろ高のような人をもっと大事にしていと思ふのだが、そう思ふ程、高などもっと内省的な確かさ——思ひきってテクニックを積み、それを自己の確かな方向——ガムシャラにぴったりと適応させ、或はテクニック其物を征服しきった上に、厳然たる自己を——「完全なる」テクニック其物の仮現となって貰ひ度いものだ。

#### 十七日 日曜日

晴。ブロンズ屋にゆき、松平にゆき、倉沢を尋ね、一緒に材木屋にゆき、午後二時過ぎ帰る。晩、綾様が古井氏をつれて来られる。

#### 十八日

晴、寒い。

#### 十九日

晴れ。寒い。いつまでも馬鹿げて寒い。

廿日

晴。暖かい。ようやく暖かいと南風が荒れて、終日止みまなく荒れ通して、家の中は何処もここも細かい砂塵でチャリチャリしてゐる。夜、一寸上原の勝チャンを尋ねる。

二十一日

風！ 氣違ひのような！

二十二日

曇り、寒い。ふるへる程。朝九時、中野の駅で上原の勝チャンを待ち、一緒に上野に展覧会を見に行く。朝倉塾の彫塑展を見、三沢に逢ふ。それから国展。伊藤のキサチャン夫妻に逢ひ、お茶をのんで別れて、一時半になったので、山下に出て松坂屋で中食、三時前帰る。五時に早く夕食をすませて、築地に行く。出物は藤森成吉氏の「何が彼女をそうさせたか？」改題「彼女」<sup>129)</sup>。堤正弘に逢ひ、帰りに二人で酒をのんでしまつて、遅く帰宅。

処で「彼女」は、藤森氏の駄作である。譬へ第六幕に至つて僅かに引きしめられるにしても、一幕から五幕までの長い間——それは単なる説明であり、場面こそ一々異つて居るにしても、説明されてゆく事も取扱ひ方もあまりに単調な一本調子であり、概念的な常套であり、深さもなく、味もなく、姿もなく——演出者は又それをよく知つて居るので、単なる外面的な笑劇として、高速度喜劇として、たわいもなく取扱つて居る。——だが又、演出者が何故にこんな駄作を上演したかに就いては、大いに疑はれていい。これが単なる傾向的な作であるとしても——そうだ、若しも演出者が芸術至上主義的な立場の人であつたならば、此の作の上演は、現下流行の概念的な傾向的な作品とはこんなものなのです、皆さん……といふ皮肉にとれないでもない。それ程何者が大きなもの、一番大切なものが欠けて居る——作者の実感が疑はれ、製作動機の必然があやまれる程にも、切実なものがなさすぎる。役者達は上手にやつたから観客を笑はせたが、観客は笑ふけれども、それは決してほがらかな笑ひでもなく、快い微笑でもなく、瞬間的な馬鹿らしさ以外の何んな笑ひでもないのだ。——そうだ、若しも演出者がデカデントなナイヒリストであつたならば、「諸君結構面白いではありませんか、是れ以上のものなんてありやしませんし、是れ以下のものもありやしないのですよ……」そんな風に云ふのかも知れない。それ程外面的な簡単さで一貫されて居るのである。

二十三日

晴。上野にゆき、国展と春陽会とを見て——会場で金子九平次君に逢つて、帰る前、食堂で一時間程話して別れ、三時前倉沢を尋ねる。倉沢と散歩に出——春の午後の柔らかな日差しの町を動坂から坂を上つて、ばら新の前を通つたので入つて見る。花屋に入

って見るのはいつでもいい気持のものだが、今は花が多いのでなかなかいい。それから肴町に出、白山から曙町、原町に出、更にぶら〜歩いてから、折れて大和村の中を歩く。大和村はなか〜静かで綺麗で、気持がいい。大和村の高等公衆食堂——燕楽軒の出店がいやらしいカンバンもなく、どっしりとかまへて居たので、入ってアイスクリームを食べる。それから更に歩いて駒込橋まで出ると、日が暮れかかる。喉が乾いたので、近所でビールを一杯ずつ飲んで、倉沢と別れて帰ってくる。二つの展覧会と長い散歩とで快く労れて風呂を浴びると、すっかりいい気持になる。

処で展覧会は——私はいつだって大変わがままで、室から室をぐる〜まはるばかりだから、ろくに見ない室もあり、友達なんかと逢って一つ室をやたらと見たりするような風だから——そんな風で画はおぼえて居るが、つい何んといふ題で誰の画だったかを忘れて了って居るような事が多いのだが——今日録をとび〜に引っくりかへして見て、画と作者とを両方思ひ出せる物を簡単に書きつけるなら——日本画は殊に作者を知らないから、画は沢山おぼえて居ても何とも書きようもない

〔龍三郎〕

国展の第二部では、何と云っても梅原氏が一段、段をぬいて居る。一体私は近頃特に痛切に感ずるのだが——私はどうも緑と青の系統の色に対してひどく鈍感で、赤の系統の色に於て丁度反対であるらしい。例へば緑の基調の画では——その緑が強い青であっても、黄色のかった緑であっても、ただただ緑として受入れるだけで——それだから、従って緑の中では別段の諧調を感じにくく、緑の中ではそれらの諧調から特別な快感乃至感興を得にくく、従って緑の画に対して兎角親切であり得ないようだ。これに反して、赤の画には大変親切で、赤の画に於ては赤を幾段にも、強度から性質まで分類して感じ、そこに諧調を見出し、そこから感興乃至快感を得る——そんな訳で、梅原氏の画は、いつもどれも赤いので、殊に私にはいいのかも知れないが、それをハンディキャップとしても、まだいいものがあるらしい。例へば、梅原氏の画から少しはなれた処に、土田文雄氏の赤い画——静物があるが、これになるとまるで中途はんばな気がする。バックの印度更紗のような赤い紋様の中に、アネモネの花が平たく埋まって居る所まではいいが、下の野菜か何のをせたお皿がキッと立体的に画かれた辺に、非常な失敗を感ずるのである。そこへゆくと、梅原氏のものでは、「裸婦ダリヤ」にしても、「チューリップ図」に於けるバックと花と壺との間にしても、全く一つ画の中に於ける部分が、互に決して他の部分を忘れないのである。そうして「裸婦ボカラ」に於ける赤と「裸婦豹皮」に於ける赤とは、各々異った赤でありながら、各々のよさを持ってゐる。

梅原氏は以前から好きな人の一人だが、梅原氏の以前の裸婦の——今の梅原氏の裸婦の輪カクはブルブルした曲線であり、一つ画の中に道具が多くなったが——そうしてこれらも亦いいけれども、以前の道具の少ない、そうしてしっかりした直線的なリンカク





二十八日

晴。五月のように暖かい。

二十九日

天長節，晴。

三十日

晴。午後風立つ。朝，倉沢の処にゆき，材木を伐<sup>〔ママ〕</sup>って持って帰る。夕食後，新宿まで出，紀ノ国屋に浅野<sup>〔孟〕</sup>猛府氏の小品がならべられてゐたので，見て来る。

○佐伯君の在仏中の画だ。中に二つ三つ帰朝後のものもあるが，帰朝後ののは皆調子の低いものだ。

佐伯君の画は，少しはなれて見ると非常にいい。色がきたなくてタッチが荒くて，調子のいい絵はみんなそうだが——ラプラートの絵をはじめ，仏蘭西美術でちよく——経験するように，佐伯君の画はすばらしく調子がいい。今度の国展にあった宮坂勝氏の絵がそれだ。宮坂氏も新婦朝者だが，外国に行ってくると，調子が——勿論色も腹<sup>〔腹〕</sup>雑になり，深くもなるが——殊によくなるらしい。或ひは外界が色調に富み，空気が——雰囲気がはっきりして居て——其の上，美術館あたりで長く——裁はれて来た洋画の根本的な——殊に技巧上の伝統を感得する事が出来るのかも知れない。だが又，外国に行つて来た人々が，そのままいつまでもいい画をかいて居る人は寧ろ少なく，日本に帰つて何年かたつと，何時のまにか目立たなくなつてしまふ方が多いところを見ると，どうも刺戟といふものが美術家には絶対に必要なもので，日本に於ては外界に於ても内面生活的にも，刺戟がやはらかいのではないかと思はれる。

佐伯君の色は，どれもこれもきたない。だが佐伯君の絵は実に美しい。

佐伯君の画き方は，佐伯君の洋服のようにかまはないと云つた風だ。だが佐伯君の絵は実に綺麗だ。

佐伯君の絵の対象は街の中に在る。街の中なら，どこの角でも，路でも，部分でもかまはない。佐伯君は，「アヴェニュー・ド・メーン」をかき，「赤い家」をかき，「白い家」を「青い家のある通り」を，そして「広告」を画く。そして其等の中に佐伯君は，君の気持をしっくりと，そしてはっきりと快適に描き出す。そして其等は，或るコンストラクチヴな構図となつて，特殊な色として浮び上り，深い調子となつて——美しい絵となる。人物は少ないけれども，人物も亦君の感覚と感情とをぴったりあはせて，深い美を表現する。ガッチリした絵になる。君は又，静物を画く。例へば君は，「アネモネ」を画く。そして，其れは又，同じように調子よくまとまり，同じようにうまく，同じようにポイントをはづさないけれども——けれども，何処か常套的な処があり，何処か

平凡な処があり、何やらガッチリしないものがあり——深さに欠ける。

君はヴラマンクのお弟子であるが、君がヴラマンクから貰ったものは、ヴラマンクの持って居ないもので——云ひかえれば、君の絵はヴラマンクの絵のように単一でなく、ヴラマンクのように一本調子でなく——君の絵はヴラマンクのよりも、いい意味での腹<sup>〔複〕</sup>雑さを持ち、色調に於ても豊かで、ヴラマンクのよりもコンストラクチヴな——そうして其処に叙実以外の内面的な深さを持ってゐる。君の絵には、明らかに一見ヴラマンクの影響を読み得るにしても、同時に性格的な、根本的な相異が、君の絵を犯すべくもなく君らしい絵にしてゐる。其の意味では、里見勝<sup>〔蔵〕</sup>三氏は、君よりももっと直接的なヴラマンクのお弟子である。だが又私に云はせれば、ヴラマンクよりは、佐伯君の方がずっとうまい——だが又これが、あんまりとんでもない言葉であるならば、少くとも私はヴラマンクの絵は嫌ひで、君の絵は好きなのだ。

○国展第二部推薦出品に、金子九平次君の在仏中の彫刻が三十点近く出てゐる。だが又気になる事を先に云って終へば、紹介出品として、あまりに沢山ならべ過ぎたので——私は自分の展覧会で知つてゐるが、これだけの作品がたまる為には、何としても三年や四年はかかる——聊か玉石混淆のきらひがある。例へばポर्टレイと題された五つの首の習作？などは、なくもがなといふ感じだ。金子君の彫刻は実に整然たるもので、譬へば立派な概念的な□□□□応接間——概念的など云ふ、即ち応接間を自分のグーによつてしつらへる人と、世間風な応接間の概念によつて整へる人とがある、後者をさすのである——に置かれるに応はしい美しい彫刻である。モデリングも、タッチもコンポジションも、そうしてそれらのエフェクトも、実に整然としてゐる。それらの彫刻を通して現はれた一切の趣味は、如何にもよそゆきで、多分に装飾的だ。それが金子君の性格なのだ。それが衛気でないことは、見てゐて気持ちいいのでわかる。実にあやうげのないよそゆきだ。

金子君の彫刻は装飾的だと、私は云つた。それは、図案的だと云ふ意味とは全然別なのだ。

金子君はブウルデルのお弟子だ。だけあって、君の彫刻はどっしりとおちついて居り、骨ぐみから肉づけまでしっかりしてゐる。君の装飾的な現はれも、よそゆきの気分も其の確固たる写実味の上にあるので、決して一歩でも圏外にふみ出るような事がないのである。君のよそゆきのな几帳面な性格は、掟の中に居て却て気楽に息づくのだ。

君はブウルデルのお弟子であるが、君の彫刻はブウルデルのあの野獣のようなあくどい力——重圧を持って居ないどころか、君の彫刻は明るくて、気分は寧ろ軽い。

君の彫刻には、理想主義的なものがある。ギリシャ的な肉体的な理想主義で、君の彫刻の人体に於ては、プロポーションは美しい均整を保ち、構図はしっかりと地に落ついて静かだ。

C嬢の像に於て、立てる男に於て、裸婦に於て、座せる女に於て、金子君のスタイルは、

完成の一段に達した。美しいスタイルである。私は最初に玉石混淆を難じたが、これらによって私達は、君のこの美しいスタイルの完成への過程をはっきりと知る事が出来るのだ。

C嬢の像に於て見る、手一手をもおろそかにしない丹念な注意——私は自分のものに対しては、一切のそうした外面的な完成を寧ろ否定してゐるものであるが□□、他人が仕遂げた、こうした丹精から来る整然たる効果を気持よくながめる。

だが又、私は金子君のスタチュエットを限りなく愛する。スタチュエットは割合に最近のものであるそうだが、小さい石膏の、又テラコッタの幾つかのスタチュエットは懐かしいものである。着衣の座像に於て、立てる女に於て、着衣の女に於て——是等の小品に於ては、人体的なプロポーションの均整とか、理智的な構図等は影をひそめて——それは、大作と小品との根本的な特性の差ではあるが、ここには主情的な可憐な君のグーの一片がこだわらずに、気軽に、そして楽しく遊んでゐるのである。私は君がスタイリッシュな美しいよそゆきの大作を続けると共に、こうした懐かしいスタチュエットをどんどん——何なら一つ位ひ私の為にも作ってくれる事を望むものである。

## 五月

一日

晴 日曜日 晴。風。午後、吉祥寺まで出かけて三角を尋ねたが、留守なのでちぎに帰ってくる。

二日

晴。曇り。夜中になって雨。晩方からいやに寒くなる。久顕サンが、三越で世界<sup>〔玩〕</sup>顔具の展覧会をやつて居て、面白いから行くといいと云ってくれたので、朝から出かけたが、あひにく昨日で終ひだったので、神田にまはって昼に帰ってくる。

三日

終日雨が降って、気温がぐっと下る。

夜、「炬火」の発送に行ったが、とうとう出来て来ないで、十一時半に帰ってくる。雨は止んで少し蒸してくる。

四日

朝から曇ったり、晴れたり、小さな雨が降ったり、少しばかり風が吹いたりしたが、午後どうやら晴れ、すっかり晴れたと思つたが、晩が雷がなつてばらばらと雨が降り出し、ちぎに止んで、ラヂオの天気予報は、「明日は日本内地はどこもいいお天気です。」



六日

晴。朝、川路氏を尋ね、新宿に買物に出る。夜、気狂ひのような豪雨がやって来て轟き降ったが、三十分ばかりでびたりと止んでしまふ。

七日

晴れたり曇ったりしたが、日暮前、雷鳴<sup>〔家〕</sup>濠雨あり、雹を交ふ。暫らくして止み、寒し。午後、能村潔君が尋ねてくれたが、一時間程で帰る。

八日 日曜日

夏のような雲が出たが、いつまでも寒い。

九日

晴。朝飯をすませると直ぐに、吉祥寺に三角を尋ねる。吉祥寺で降りて畑に出ると、初夏の朝が爽々と美しい。八時に三角の家に着いて見ると、まだ起きて居ないで家中の戸が閉まって居るので——だから私は又、畑の中を更に奥の方に歩いてゆく。日の光は明るく、畑と林の緑は明るく、風は冷たく、空には雲雀がどこにでも鳴いて居る。私は何にも考へないで、只々久々の朝をステッキをふりまはして歩きまはり、九時に再び三角の家に戻って来る。だが、依然として戸はしまっていて居り、しまっていて居る戸に明るく光が差し、戸の中は依然として静かな夜にちがひない。そこで、私は三角の寢室の外から声をかける——おーい、まだねてるのか。中からも、おーい……あゝ、ねむいな——今起きる。それから、中から戸をあけて、しぶそうな目をしばだたいて居る。三角は三月に結婚したのだそうで、若い奥さんも、亦起きて、台処の方で何かはじめる。上って暫らくして、三角の食事のすむのを待って、又々散歩に出る。だが今度は、三角の自転車に私がついて、三角は側について歩くのだ。

さっき私が一人で歩いたのより更に大きく一まはりして、十二時前頃に三角の処に帰る。その頃から、風が烈しくなる。昼食を馳走になって、チェスを戦はして、三時に辞して帰る。

○初夏の朝の畑中である

背丈程の桑の<sup>畑に</sup>□□黄緑と

腰下の麦の穂とが割をなしてうち続き

彼処に檜の林があり

此処に又杉の森があるけれども

坦々として

眺めは一つであり  
只続く緑であり  
一律に初夏の朝の光を浴びる  
あけっぱなしの外景である  
微風もよし  
空！  
紺碧の遮るものもない空と空の色である  
私の耳は聞く  
果しない空の一点から響く雲雀を  
私の耳は更に聞き  
そうしてそれは正しく大空の二点からである  
そうして私の耳は聞く  
それは紺碧の空の何処からでも  
今や雲雀は大空の何処にでも鳴いて居り  
私の耳は聞く  
大空に充つる無数の雲雀を  
その響を、その響きを  
私の耳は今やあらゆる感覚の総てとなって  
大空の叫びを聞く、大地の歓喜を大気の動音を  
異常な畏怖であり有頂点であり重々しい重圧である  
生めよ殖えよ地に充てよ  
いや  
否  
戦へ勝てはびこれ  
いや  
否  
狂飲へ蕩酔の空虚へと  
終りなき終りへと  
死！

十日

晴。

十一日

晴。どうやら氣候らしい氣候になる。だが、夕方から風が荒れ——月が出て居るのに、風に乗って雨がぱらぱらやって来たりした——又々寒くなる。

十二日

晴。寒い。其上私は歯が腫れ上り，咽が腫れ上り——

---

○二人は寄添ってゐる，二人は  
何故かしっかりと寄添ってゐる  
明らかな白日のさなかに  
又暗夜の底ひなきしまの中に  
男は青い衣をまとひ  
女は赤い衣をまとひ  
二人の髪は脂色にちぢくれ垂れ  
二人の頸はしっかりと胸につづいてゐる  
二人の胸は重々しく前に張り  
二人の円い顔の中に  
二人の鼻は真直に前を向き  
二人の頬べたがほんのりと紅い  
二人の唇は隠しだてするように小さく  
二人の目は生々と大きく見ひらき  
二人の瞳は互に互の方へと  
寄添ってゐる，二人の瞳は  
何故か互にひそかに寄添ってゐる  
そうして二人の思ひは  
度し難いいたづら好きなこわっぱの  
今踊り出ようとする茶目である

別の二人が寄添ってゐる，別の二人は  
何故かしづかに寄添ってゐる  
明らかな白日の光にも  
又暗夜の底ひなき時にも  
男は全く横を向き  
女はちっと前を向いてゐる  
二人の髪は長々ともつれて流れ  
二人の頸はほっそりとうねり  
二人の鼻は高くするどく  
二人の頬を影のような笑ひが過ぎる



二人の口にも淋しい波がよせ  
二人の目は深々と落ちくぼみ  
二人の瞳は関心と無関心とに  
互の心のように暖かく淋しく  
互の姿のように冷たく静かに  
他である事によって自らを深め  
自らである故に他を□□□<sup>しの</sup>思んで  
霞のようにけしきに溶けてゐる  
そうして二人のうち  
男は既に決して男でなく  
女は誠に既に女でない

-----

#### 十三日

曇日。伊藤熹朔の展覧会が明日からなので、今日は飾付けだらうと思って、早昼で丸善に行ったら、昨日から飾って居たのだそうで、既にあらまし飾れて居た。

#### 十四日

終日雨が降って、頭が散漫だ。午後から啄人啄語に出たが、頭が散漫で一言だってしゃべる気がしない。夜十一時帰宅。

#### 十五日

六月のような心よい暑さが朝からやって来たが、午後、築地のマチネーを見に出かけたら、忽ち西の空から墨のような雲が現はれて、無言のうちにうちひろがり、やがて爆発するような雷が来て、大粒な雨が霰のように飛び、流水のように流れた。だが丁度二三時間の後、マチネーがはねた時には、雨も上って、黄色い日が明るく爽やかに照ってゐた。銀座で倉橋、伴野君と別れて丸善にゆき、日暮方帰宅。マチネーはショロム・アッシュの「復讐の神」<sup>130)</sup>とニコライ・エウレーノフの「心の劇場」<sup>131)</sup>。

#### 十六日

晴。朝早く博物館にゆき、埴輪を少しばかり写してくる。

#### 十七日

晴。少し早めに昼食をすませて博物館にゆき、埴輪と唐の土偶を少しばかり写してくる。

十八日

雨。夕方、丸善に行く。

十九日

夕方、川路さんへ行った帰りだとして、村野君、伴野君、倉橋君が揃って来る。

二十日

晴。今日こそ五月の二十日のような天気だ。

二十一日

天気よし。風だって埃がひどい。朝、アトリエ社まで行ってくる。

二十二日 日曜日

午前、晴れたり曇ったり、午後降ったり止んだり。

二十三日

晴。暖か。

二十四日

小雨。馬鹿げて寒い。日中でさへ六十度<sup>132)</sup>を僅かに超えたばかり、真暗で馬鹿げて寒い。

二十六日

曇、晴、曇、晴。

午前中、伊藤のキサチャンを尋ねる。午後、三沢と荒居の徳サンとが来る。

二十七日

曇、晴。晩方驟雨。相も変わらず兄が、兄が、兄がなので、夕食後、<sup>〔土方与志〕</sup>敬チャンに逢ふ為に、築地まで行ってくる。

三十日

二十八日、朝、一寸、川路氏を尋ね、鎌倉にゆく。二十九日、日曜日を一日鎌倉でぶら〜過し、今日は朝の汽車で帰京。晩、帝国ホテルに心座<sup>133)</sup>の演出を見にゆく。

アンリ・ルネ・ルノルマン作「時は夢なり」。黙殺！何だって今時分こんなものを演出するのだ。戯曲「時は夢なり」。黙殺！演出。黙殺！若い人達の一途に高潔な（但し概念）態度から生れる——舞台上の再現主義——自然に近づかうとして、只々みじめな

不自然さを露出させてゐるような――。

第二は、彼の極めて愉快なる才人山師、村山知義氏の自作自演出「スカートをはいたネロ」で、予想通り、山といふやまは、総べて適中する。現代人都会人は、こんなやまに自らひっかかって面白がるのだ。――只、前衛座の御連中のいい気になりっ振りは、たわいがなさすぎる。

## 六月

### 一日

午後、三越に行って、お祝物を買って、中井の良サンの処にもってゆく。渋谷の停車場で園子サンに逢って、一所にゆく。宿る。

### 二日

曇。小雨。良サン夫妻は、夕方昇サン〔山口〕に呼ばれてゐるので、早めに昼をすまして三人で一所に出、三軒茶屋で園子サンに別れ、良サンと二人で佐野丁治の処を尋ねる。五時頃辞し、若林の停車場で良サンと別れる。

### 三日

曇。夕方、新宿まで買物に出る。〔ママ〕紀の国屋で吉田卓、林重義、古河春枝三氏〔江〕が展覧会をしてゐたので、のぞいてみる。

### 四日

曇日。大掃除で仕方なしにそこいらを簡単にかたづける。かたづけて見れば、気持ちがいい。

### 五日 日曜日

毎日毎日の陰気な曇日が爆発するでもなく湿っぽく引続いて、とうとう真暗なしよぼー雨になり、終日降って益々蔭鬱な一日だ。

### 六日

晴。夏らしい陽差、白い光が飛び出す。朝、川路氏が渡仏されるので、東京駅まで送りにゆく。それからが大変なので、川路氏の奥サンの一行と炬火の連中と丸ビルでお茶を飲んで別れ、炬火の連中、日本橋に出、あてもないのでぶらぶらぶら歩いては相談し、立止まっては考へ込んだが、朝っぱらとて、ぶらーする位ひより外もなく、十一時に結局開散〔解〕してしまふ。それから、能村君と銀座を歩き、又々日本橋を歩き、松

屋に行き、宝文館にゆき……神田駅で別れ、上野に明治大正名作展を見るつもりで出かけたが、会場前で佐野釘治に逢って食堂で話しこみ、結局——展覧会を見るにはあんまり疲れ過ぎて居たかも知れない——佐野が私の彫刻が見度いと云ふので、一緒に中野に帰ってくる。夕方、佐野を送りながら、其辺をぶらぶら歩いてくる。日暮前小雨。

七日

晴，曇。

八日

晴。日中は気持よく暑かったが、夕方からすっかり曇って、雨風が吹いてひえ〜にする。夕食後、あまり御無沙汰して居るので、小石川へ行ってくる。十時半帰宅。

九日

晴。気持よくむう〜と暑くなる。午後、三沢が尋ねてくれる。

十日

晴。

十一日

晴。本物の夏がやって来た。朝、明治大正名<sup>〔作脱カ〕</sup>展覧会に行き、山下で昼食をすませて麹町区役所に行ったが、土曜日なので用が弁せず、田辺サンにゆき、麻雀をやって遅くなる。

十二日 日曜

晴。午後、母をつれて笹塚に行く。昇サンは留守だったが、宇多<sup>〔山口〕</sup>チャンが居たので四時頃まで居て、新宿で母と別れて、自分は川路氏の留守宅へ碌人碌語にゆく。今日は馬鹿に遅くなって、家に帰ったのは十二時半だった。

十三日

晴。宵に一時間程雨。

午後、麹町の区役所に行き、柳病院に多摩ちゃんを見舞ひ、田辺サンに行ってトマトの苗を貰って、新宿に出。夕方帰る。

十五日

晴。午後風だち、夜雨。

朝、麹町の区役所に行き、池尻の東洋金網会社に行ってくる。

十六日

終日雨。夕方晴れたので築地に行ったが、帰りには又ぼそー降ってゐる。

築地では、モルナーの「リリオム」<sup>134)</sup>をやっている。なつかしい夢物語。私は此の芝居を一年半程前に読んだ。記憶が次々に甦って行った。少しばかり外れてゐる処もあった。なんてあまいんだ。私もこんなあまさに打って打って、ふたれ度いものだ。  
〔伊藤嘉湖〕キサチャンの舞台装置も、此の明るい夢物語にしっくりして、あまくって綺麗だった。殊に郊外の遊園地の四ツ辻、写真館のアトリエ、それからユリアの家はよかった。第四景の幕ぎれはもっと味が残らないものだらうか。どうも二人の騎馬巡査と二人の天国の刑事が邪魔者だった。それから、第五景の幕切れ少し前は、馬鹿に綺麗にゆきそうだったのに、天国の刑事二人が出て来てから、すっかりぶちこわしてしまったのは惜しい。もっとやはらかくゆかないものだらうか。

十七日

曇、晴。午後、鎌倉にゆく。晚十一時の汽車で、昌生叔父様は演習に立たれる。

十八日

曇、晴。

十九日 日曜日

曇、晴。終日子供達と馬鹿さわぎして、すっかり労れる。夕食後、六時五十七分の汽車で帰京。

廿日

晴。築地の三週年祝賀会が豊島園であったのでゆく。  
〔周〕

二十一日

午後。キサチャンの処に人形座の稽古を見に行く。夕方前、岸さん〔椰子〕も来たので、残って夕飯を御馳走になって遊んで居たら、河村邦成が来、トランプなどして十一時過ぎ辞して帰る。

二十二日

晴。夕食後、久頭と上原サンに行く。泰山木の花があまり美事〔見〕に送〔咲〕いてゐるので、一輪貰ってくる。

泰山木の花 葉を押し分けて大きく けざやけく 白き泰山木の花

泰山木の花 壺に生けしが 壺に生けて あまりに大き 泰山木の花  
 泰山木の花 八千代子が銕くれしかば 切りて持て来し 泰山木の花  
 泰山木の花 花びらの白 見ン事も豊かに円き 泰山木の花  
 泰山木の花 あまりに豊けき □□□<sup>静かに</sup>つくづくも 見れば豊けき 泰山木の花  
 泰山木の花 したたる青き 葉に埋れ 見る程に深き 泰山木の花  
 泰山木の花 深くも見入れば ひたすらに その香せまり来 見のいよよ深く  
 花と云へば なめきに似たり泰山木の花 いよいよ白くいよいよふかき  
 小夜すがら 大夜すがらに 向ひ居て 見も□□飽かまほしき 泰山木の花

### 二十三日

夜、三沢を尋ねる。

### 二十四日

昨夜、母が軽いぜんそくをやった為に、今朝方、三時過ぎまで寝られなかった。此の二三日ひどく寒かったが、とうとう今日は□□雨になって、ますます寒い。

### 二十五日

小雨。だんだん止む。

午後、築地のマチネーに行く。出し物ハ、

ジャネット・マアクスの「郭公」<sup>135)</sup> 一幕

グスタアフ・ウィイドの「秋の火」<sup>136)</sup> 一幕

バーナード・ショウの「現実を覗く」<sup>137)</sup> 一幕

それから、与志ちゃんと三洲屋でビールを飲み、とうとう四谷の千秋まで行ってしまつて、一時半頃家に帰る。

### 二十六日 日曜日

曇。パラパラ雨あり。

午後、三沢と荒居の徳サンが来る。

### 二十七日

曇。小雨。午後、田辺サンが来られる。



MANET AITÂ MENTE REPOSTUM  
AD INFINITUM

二十八日

晴，曇。

なんて、なんてながいこと、ぶらぶらした事だらう。気候のせいでもあり、咳の為でもあり、蓄膿症の為でもあり、それよりも多分、はなしはいつもの、気分の為でもある。

昨日から新しく届いた常滑土で、たんねんに細工ものを拵へてる。だが又、多分お天氣のせいで、根気がない。ごろごろねころび度くなる。寝ころんで——現代日本文学全集の漱石集が来てゐたので、みぢかそうで、はじめてのものをひろって読んで見る。

漱石のもの云へば、数にしたらそれほどでないにしても、随分読んだものだ。あんまり長いものは、昔から根気の足りない為か読んで居ないが、短いものは随分読んだ。「永日小品」のさらとした味を喜んで、しばしば嘗めたものだ。「文鳥」もなんともないけど好きだった。「思ひ出す事など」は、殊の外好きだった。それよりも、「草枕<sup>(ママ)</sup>」何度も読んだ。「硝子戸の中」も、いつまでも勝手な頁をひろっては読んだ。「ころ」を三四年かもっと前の夏、鎌倉の家で読んで、かんしんした記憶もある。「猫」は一番はじめに読んだと思ふが——中学三年頃か、大阪に鼻の療治に行つて居た頃だった。夏

のことで、朝早く大阪に行って、鼻を洗って、ちきに電車で芦屋の家<sup>138)</sup>に帰って来て、それから、暑い、夕方まではみんなも帰って来なかったり、或は一緒になって、だらけて居たりして——だから、二階にごろごろしては、石本の憲さんの本箱から手あたり次第にアカギ叢書だの、少しばかりあった単行本だのを引出しては読んだ。その時、「猫」をそんな風にしてはじめて読んだのを思ひ出す。そうして、くす〜笑ひ出したりしながら、大いに暑さを忘れた事もおぼえて居るが、さてどんなものだったか、まことにたよりなく忘れてゐる。それから「猫」は、一度読み度いと思ひながら、多分長過ぎるせむでか、とう〜今まで読んだ事がない。だが今日、「倫敦塔」をよんだら、漱石自身が倫敦塔は一度見るもので、二度見ないことだと云つてゐるから、いい印象を保つてゐるものは、兎も角、も一度読まないことにしてもいい。「坊ちゃん」「二百十日」「三四郎」なども、そう云へば、随分面白く読んだものだが、今も一度読んだら、あんなに無邪気に面白くなれないで、いやみに思へるかも知れないような気もしないではない。

### 倫敦塔

憂の国に行かんとするものは此の門を潜れ。  
 永劫の呵責に遭はんとするものは此門をくぐれ。  
 迷惑の人と伍せんとするものは此門をくぐれ。  
 正義は高き有を動かし、神威は、最上智は、最初智は、われを作る。  
 我前に物なし。只無窮あり、我は無窮に忍ぶものなり。  
 此の門を過ぎんとするものは、一切の望を捨てよ。  
 葦露行（マロリーのアーサー物語より）（カメロットの館）

シャロットの女	王妃ギニギア
騎士	ランスロット
美しき少女	エレーン

二十九日  
 □□□□

三十日

曇、晴。なか〜蒸暑いが、暑いからがまんしてやる。

夕食後、倉沢を尋ねる。倉沢と渡辺君<sup>139)</sup>と三人で、富士神社<sup>140)</sup>のお祭にゆき、駒込橋までぶら〜歩いて別れる。

### 七月

一日

処がなかなかうまくゆかないもので、ママが昨夜又々、軽い発作をやったので、夜中



起こされて了ふ。

朝日と共に雨が降って居たが、間もなく止むで風になる。梅雨時らしい厚い雲の切れ目に、深いあをい空が深い。

多分風が吹いた為か、午頃、文子サンが来た。私は昼寝をしてから、祖母様の命日なので、お墓参りに行って、夕方帰って来る。

晩九時頃になって、綾サンが来て、十時頃兄上をつれて帰って行く。それから今日は、一日蒸々して、肌にとっとり汗が渲んで居た。

## 二日

晴。風荒立つ。景気よく暑い。

夕方から、佑サンの処の皆と朝日講堂に人形座の公演を見にゆく。出物は、河村邦成構想「ジュジュウ」（パントマイム）、小山内薫作「三つの願」、小山内薫作「人形」

---

静かにおし  
夜だ  
きこえないか  
母の寝息だ  
いいや、小さな蛾が  
ランプのかさにぶつかるのだ  
それとも夏の夜の縁の下の  
小蟲の声だ  
窓下の薔薇に風が吹くのだ  
紅い花片に露がおりるのだ  
古井戸に木の葉がちるのだ  
籠のカナリヤの子の  
巢の中に寝がへりをうつのだ  
いいや、星だ  
はじめもない、終りもない道を  
星が流れるのだ  
夜が深くへとめぐるのだ  
遠いものの近寄る音だ  
新らしい命が  
□□□□□なかつたものが  
新らしい命が  
赤ン坊の産れる気はひだ

未来の殻が裂けるのだ  
 希望がふるへるのだ  
 見えない処に  
 暗闇に光が育つのだ  
 それとも多分  
 近所のもの  
 友達が、恋人達が  
 親達が、子達が  
 今の今あるものが  
 今しがたあったものが  
 そっとはなれ去る夢だ  
 影だ  
 祖先が、古代が  
 歴史が、過去が  
 ゆっくりとずってゆく  
 ゆっくりとずってゆくものあはれだ  
 静かに  
 静かにおし  
 夜だ  
 多分  
 そうだ  
 多分  
 □□そうかしら  
 母の寝息□□□□かしら……

三日 日曜日

晴。

(マダム X に)

優しい奥さん

若しもあなたの小さい手を

只々遠くから見せて下さるのでなくて

私の唇で密〔蜜〕のように吸はして頂けるのでしたら

優しい奥さん

若しもあなたのいちらしい唇から

只々慕はしい声をお聞かせ下さるのでなくて

私の胸にふれる「言葉」を投げて頂けるのでしたら

優しい奥さん

若しもあなたの小鳩のような胸を

只々人知れぬ影に波うたせるのでなくて

私の腕にしっかりと寄せかけて頂けるのでしたら

優しい奥さん

若しもあなたの美しい瞳が

只々白百合の花のように静かに深まるのでなくて

私の心の火に風のように笑ひかけて頂けるのでしたら

優しい奥さん

若しもあなたのひそかな夢が

只々あまりに遠い聖所をしのばせるのでなくて

私のいやしい憧れを慰んでゆるして頂けるのでしたら

優しい奥さん

若しもそうでしたら、若しも若しもそうでしたら

奥さん!

あなたは<sup>何んて</sup>□□□なんて甘い、なんて優しい人殺しでせう□□

四日

すばらしい晴天で、暑さもいよいよ本物——それが午後曇って、真暗に曇って、風が死んで、蠅も飛ばなかったが、三時に雷がなって、驟雨がどしゃどしゃ降って、雷の止んでからも雨は静かに降りつづけて、それでも夕方過ぎて止んで、<sup>死</sup>□夜が馬鹿に静かで、一時涼しかったのが、又また暑い。

七日

<sup>五</sup>□四日の夕方からか雨になった。五日の夜十二時に寝ようとする時、十二時十分<sup>(惨)</sup>に母が動気がすると訴へるので、久顕が直ぐに医者にかけた。いつものぜんそくが軽く来たが、久顕が帰り、英子が来た後に、六日午前0時四十五分には、心臓麻痺で全く息絶えられた。佑さんが来られたが、間に合はなかった。医者が0時五十分に来てくれたが、どうにも仕方もなかった。英子と久顕と三人で死体を潔め、室を片づけたのが三時だった。<sup>六</sup>□五日午後十一時前に入棺。六日 午後四時、棺前祭、告別式執行、直ちに火葬場に。

七日 朝, お骨ひろひ。

八日

葬儀。茅ヶ崎にて。曇。

九日

十日祭と五十日祭を引寄て執行。晴。

十日

曇, 雨。例の兄が兄が兄がを最後に一言説明しようか。兄は<sup>四五</sup>□□四日に家を出て, 母の死目に逢はず, 六日の夜十一時に, 親戚達の満座の中に漸く納棺式に, 他処で母の死を知って帰って来た。それから, 八日茅ヶ崎に葬儀を終へて別れたきり, 其のまま家に帰らず, 九日午後一時, 十日祭, 五十日祭の前一時間に, 文子様をつれて帰って来たのだ。

十一日

晴。夕方小雨。

十二日

晴。結構暑い。皆が<sup>〔解〕</sup>開散する前にと云ふので, 夕食を皆で, 佑サンの処に呼ばれる。

十三日

晴。誠に暑い。兎も角も, 午後, 兄の荷物がトラックで出発する。晩, 三沢の処にたのみごとをもって行く。

十四日

朝, 鎌倉にゆく。夜, 帰る。兄上は今日から, いよ〜他処に行かれる。

十五日

十六日

夕方, 小石川にゆき, 築地にゆき, 与志チャンに逢ひ, <sup>十七日 日曜日</sup>□□□□□□十一時二十分の汽車で与志チャンが立つのを, 上野に送って別れる。

十七日 日曜日

晴。昨日今日, □□すこぶる暑い。今日, 終日かかっていよ〜六百二十番地を引き

上げ、余計な荷物を佑サンの処に持ちこむ。自分は朝、自動車で小石川に彫刻をはこび、鶴岡病院に梅子<sup>(上方)</sup>サンを見舞ひ、生れて一週間目の与平<sup>141)</sup>君に会見して来る。夕方荷物を鎌倉に送らせる。

#### 十八日

午後六時十分の汽車で鎌倉に来る。夕方曇り。汽車に乗ってから、鶴見の辺でどしゃ降り、横浜で晴れ。戸塚辺で小雨、鎌倉はまだ降って居なかったが、駅におりると大変な風で、電光と雷鳴とがしきりである。妙本寺について間もなく、驟雨がやって来る。電光雷鳴が遠のいてからも、雨はそのま<sup>(ママ)</sup>は弱くなり、烈しくなりして止まない。

#### 十九日

朝、床屋にゆき、何年ぶりかで頭をみじかくかってしまふ。晴れたり曇ったり、青空から終日雨が落ちたり止んだり。梅子叔母様は昼に出京され、夜帰って来られる。

#### 二十日

<sup>晴日</sup>  
□□時々晴れたが、終日曇りがち。

午後、一寸海に行ってつかってくる。

#### 二十四日 日曜日

二十一日、夜出京。二十二日、小石川へ行き、染井墓地にゆき、小石川で昼食、松平に行。二十三日、朝、鎌倉にかへって来る。二十四日、茅ヶ崎に墓参に行く。小雨。終日小雨が降って、梅雨時のように寒くてしめっばい。

#### 二十五日

終日小雨して、ひよ〜と寒い。

芥川龍之介氏の自殺が新聞に大きく出てゐる。

#### 二十六日

午前中曇り勝ちだったが、午後晴れたので、子供達をつれて海にゆく。

#### 二十七日

晴、午後、海へゆく。

#### 二十八日

晴。叔母様、朝出京、夕方帰鎌。

二十九日

晴。午後、海へゆく。

三十日

晴。午後、海へ。晩、秋庭サンが千代チャンをつれて来られる。

三十一日 日曜日

晴。午後海へ。

夜、子供達をつれて、海浜博覧会へ行く。

八月

一日

晴。午後、海へ。今晚から四日間、築地の芝居<sup>142)</sup>が鎌倉劇場<sup>143)</sup>にかかったので、晩方一寸劇場まで行ってくる。芝居は見ないで、長谷の方を歩いて帰ってくる。

二日

晴。午後海へ。帰りに、荒木さんのおばさまにお逢ひする。

三日

朝早く出かけて、茅ヶ崎にお墓詣りに行ってくる。帰る頃雨に降られる。午後二時半頃になって雨が止んだので、海にゆく。海で築地の人達に逢ふ。夕食後、鎌倉劇場に築地の人達の芝居を見に行く。

四日

曇、午後晴。午後海。

八日 記

五日の朝がすばらしくいい天気、九時四十八分で出京、十一時に中野についたが、午後三時に驟雨あり、夜に入って再び驟雨あり、母がなくなって丁度一月になるので、皆で一所に食事をする。お玉様も来られる。六日朝、倉沢の留守を尋ね、江波の留守宅を尋ね、中食後、二時に辞して、田辺サンを尋ねる。田辺サンに行ったら、朝からあやしげだった天気がとうとう雨になる。帰り、三沢を尋ねたが、留守だった。七日 日曜日 朝、三沢を尋ね、夜、佑サンと子供達をつれて、日比谷、銀座に出る。 八日 快晴。三越により、午過ぎ、鎌倉に帰って来る。

九日

晴。午後、海へ。海そろへ荒れる。

十日

晴。夜、叔父様、演習よりお帰り。

十一日

晴。午後、海へ行く。夕刻より蒸暑く、小雨あり。

十二日

晴。午後、海へ。海岸で湯地孝に逢ふ、随分久しぶりで逢った。訪問を約して別れる。

十三日

晴。朝、茅ヶ崎にお墓参りに行く。お末様の処により、昼食を御馳走になり、何年ぶりで日中海岸に出る。三時五十四分の汽車で帰鎌。

十四日 日曜日

晴たりかげったり、日暮前、驟雨。十時半に英子と久顕が忠直をつれてやってくる。同じ汽車で三沢と荒居の徳サンがやってくる。海に行きボートを出す。皆は夕食後、九時二十分の汽車で東京に帰る。

十五日

晴。

十六日

晴。朝、<sup>(江波)</sup>知治サンが来る。鎌倉の浜でボートをうかべ、午後、逗子の四杉サンの処にゆく。海二入り、四杉サンで夕食の御馳走になって、晚九時半帰鎌。

二十日

晴。朝、鈴木サンの明サン、藤子サン、武雄サンが来る。午前、皆で海へ行く。鈴木サンの人達は、晩の汽車で東京に帰る。

二十一日

晴。直矢叔父様のお日なので、逗子まで海老を求めにゆく。四杉サンに行つて昼食を御馳走になって、午後帰る。

二十二日

午後、江波夫妻、南兎をつれて来る。夕方、八幡様、大仏観音を見、海岸に出、駅前夕食、江波は東京に帰る。午後、川上サンの松子叔母様が来られ、夜帰られる。夜、左武郎サンが来る。

二十四日

母の五十日祭にあたるので、茅ヶ崎で墓前祭を行ひ、東京に出る。

二十五日

田辺サンに行き、神田の本屋をぶらつき、江波を尋ねる。

二十六日

夕方、鎌倉に帰って来る。

二十七日

晩、秋庭サンの方々が皆で来られる。

二十八日

田辺サンが来られる。

二十九日

馬鹿に涼しい。秋が目の前にやって来たのだ。築山に白萩の花が大分咲いた。長い間花壇を賑ははしてゐるカンナに、ほんの少しばかり衰へが見える。風に悲しみがまじって来た。夜の遠波の音が高らかに鳴り出した。夕の蟬しぐれにあはれがひそんで来る。こほろぎの声がしげくなって来る。……夕方、私は長谷まで本屋をさがしに行く。本屋には、あか〜と燈がともって、雑誌に読みふけてゐるお客もあったが、私の読めるような本は只の一冊だってなかった。隅から隅まであさったが——一体私はどんな本をさがしに来たのだらう？ 美術の本は本当に一冊もなかった。それから、私の読めるような本は全く一冊もなかった。だが、私はとう〜一冊見つけた。フランシス・ジャムの詩集を。母が亡くなってから五十日の余が過ぎた。私は此の五十日の百日も前から、私の哲学に——と云ふより、私は私の哲学の外に、何かも一つのものを見つけなければならぬ気がしてゐた。それが何だかはっきり知りもしなかったし、ほんやりも知らなかった。まして、フランシス・ジャムだなどは夢にも思はなかった。而して、ジャムだって、何うだかわかるものか。だが、ジャムの詩集を見つけた時に——多分、只の一冊だって、私の読める本がなかった時に、たった一冊のジャムを見つけた時に。一口に



云へば、忽ち今の今、私にはフランス・ジャムのセンチメントが懐かしいものだと思つたのだ。私だってロマンチストになつていけない理由はないだらう。そこで私はジャムを一冊買って、満足して帰つて来る。ジャム氏！今夜はものうい、誠に一寸逢つたばかりだが……では、機嫌よくおやすみ。明日からゆつくり君のおはなしを聞くことにしよう。

### 三十日

夜が明ける前に、非常な雨で目覚める。雷も鳴つてゐたが、遠い。雨は全くすばらしい雨だった。雷は去つたが、雨は午後まで降つたり止んだりしてゐた。日暮前に霽れて、澄んだ青空が深い。

### 三十一日

晴。時々戻る。急に秋めいて、涼し過ぎる。夜、左武郎サンが帰るので、駅まで送つて出る。

## 九月

### 一日

震災の日だが、誠におだやかで涼しい。

### 二日

二百十日なのだが、誠におだやかで涼しい。

### 三日

処が、昨夜私が寢床に入つてから、雷がなり出して、雨が降り出した。今朝方、雨は止んで晴れたが、怪しげな雲が後から後から、空一面にうろついてゐる。

### 四日

どうやら晴。寒い程涼しい。叔父様は朝、子供達をつれて東京に行かれ、晩まで帰られないので、昼間中家はいつになく静かだ。

### 五日

曇、晴、曇。朝、茅ヶ崎にお墓〔詣脱カ〕りに行つて来る。

### 六日

雨止んだり降つたり、時に日が照つたり。

七日も雨が降ったり止んだり  
 八日も雨が降ったり止んだり  
 九日も雨が降ったり止んだり、夜になって止み、十三日程の月の下を雲が飛んで雲が飛んで

十日

すばらしい秋の青空が悲しい。

昼が明るく風立ち、夜は十五夜の月が皎々、昨夜と同じ雲がその月の下を北へ北へと走る。

晩、久顕がやってくる。

〔欄外に記す〕

〔(六日)〕

話<sup>〔欄外に記す〕</sup>って云ふのは□□□□□□□□, [とりとめもない話しさ]

子供部屋のように取り散らかった  
 たわいもない追憶のかけらのことさ  
 六月の二十五日にぎらぎらと陽が照って  
 六月の二十九日にぎあつと雨が降って  
 七月の五日に急に私の母が亡くなって  
 七月の十八日に私は海にやって来た  
 八年前に私の父がなくなった時  
 私はつくづく考へた  
 もうもう決して母をなくなすまい  
 そんな私が毎日毎日海につかって  
 こんなに真黒になっちゃった  
 子供のように昨日の悲しみを忘れちゃった  
 ひより続きの真夏が過ぎて  
 こほろぎがしめっぽく啼き出した  
 からっぽの五十日が飛んで行って  
 雨と一緒に九月が来たのさ  
 蝉しぐれがかすれてしまって  
 妙本寺の御堂はびちよりだ  
 毎朝毎朝朝早やに  
 雨にまじって大坊主小坊主の  
 蛇苦死堂でのお経と太鼓だ

父の亡くなったのは——昔のことだ  
母の亡くなったのは——にも慣っこになった  
□□□□□□□□それも過ぎたことだ  
家のないのにも慣れっこになった  
榎子格子の小窓の下の  
溝で蟹めがまま食ってござる  
濡れて蟹めがまま食ってござる……

十一日 日曜日

昌生叔父様、今日より演習にて、早朝、辻堂に行かる。  
父の八年の命日なので、日暮前、久顕と茅ヶ崎にお墓詣りをし、東京に出る。久々で  
新橋で降りて、銀座を歩く。

十二日

天気が全くよくなったら、暑さが逆もどりしてひどく暑い。朝、上野に展覧会を見に  
ゆく。院展からはじめて二科を見、更に構造社<sup>144</sup>まで見て、がっかりしてしまふ。美  
術学校によって、三沢、〔寛〕〔荒居徳亮〕〔勝四郎〕〔清〕〔実〕〔猪千二〕荒井、村田、中川、藤沢、中田等の皆に逢って、午後丸善に行く。  
日本□□□橋で、久々に石渡六三郎に逢ふ。夕方、中野に帰ると、日暮れて驟雨。

十三日

終日雨降ったり止んだり、ごろ／＼して居る

十四日

引続き豪雨。午後晴。夕方、兄上来られ、十時頃帰られる。

十五日

晴。朝、神田に出て本屋を見て歩き、昼前鎌倉に帰って来る。八幡様のお祭なので、午後、  
百合子、綾子に引ばられて出かける。

十六日

曇。午後暫らく晴れ、後再び曇り。

十七日

朝小雨。曇、午後晴れ、雲多し。

十八日 日曜日

曇。小雨。

十九日

よく晴れて、秋の気が爽々。

二十日

又忽ち雨。朝、島村サンに行ったら、お叔母様御留守なので、ちきに帰って来る。

- ✓この土手の叢の中に彼岸花彼岸の雨に紅のさやけさ<sup>アカ</sup><sup>145)</sup>  
 ✓人も<sup>見ぬ</sup>□□来ぬ裏土手に群れし曼珠沙華彼岸の雨にぬる<sup>い惜しさ</sup>□□□□あはれも

- ✓窓近く梟鳴く静けさや寺の秋  
 ✓秋雨に曼珠沙華の紅や裏土手に  
 ✓善哉此の日此の寺に聞く彼岸雨  
 ✓濡れて惜しき身にも無し況て善き寺の雨

二十一日

快晴。天高気爽。

- ✓寝る犬に秋日いっばいの芝広き

二十二日

暗雲。午後又々雨。夜に入りて益々本降りになる。

二十三日

明方までひどい降りだったのが、晴れて風だつ。

- ✓雲切れて青空見せし秋嵐  
 ✓松の間に<sup>ま</sup>遠き真竹のゆらぎ哉

二十四日

晴。夕方、百合子、綾子をつれて、嶋村さんに行ってくる。

二十五日 日曜日

二十六日

晴。あぶなっかしい晴。

二十七日

終日雨で、十一月のような寒さだ。

二十八日

梅雨時のような雨止まず。

二十九日

終日の雨に、冬になる風が寒く吹く。

三十日

ぶら〜して居るうちに、九月も末だ。そして今日はすばらしい晴れだ。晩雨。

## 十月

一日

小春が近い。あまりによい天気だ。午後、名越から小壺〔坪〕の方まで三時間程も散歩して来る。

✓歌人木下利玄が此処に住みきとここに来て見る曼珠沙華曼珠沙華悲はかなし

✓片山ノ山ノ頂ノ松ナミノ秋ノ色カモ

〔欄外に記す〕  
[✓黒きまで 淀める海に 小坪の海によき色ぞ かなしき色ぞ 赤き舟二つ。]

二日

終日糠のような雨。

三日

晴。

四日

晴。綾子をつれて附属<sup>146)</sup>ノ運動会を見に行く。午にイネが来たので、自分はかほっ

て帰ってくる。

五日

霧雨。

六日

午前中，細雨，午後晴。

七日

晴れて風がなくて，霞んで秋が深い。

午後，茅ヶ崎にお墓詣りに行ってくる。

✓薄ノ穂スコシ見ニ早シ其処シ好シ

✓猫ジャラシツンツン伸ビテ畔ノ暮

八日

煙のような小雨がだんだんしげくなって，夕方には本降りになる。

九日 日曜日

晴れ。

朝，百合子，綾子をつれて秋庭サンに行く。

午後三時頃，おやつを食べてから，ぶらぶら外に出，海岸にゆく。日曜日ではあり，天気はよし，海岸は秋が深いとも思はれぬ程に人が沢山出でゐる。かけ茶屋もまだ一軒残ってゐるが，さすがに海につかる人はない。滑川の川口には，太公望連が閑かにうきとにらめっこをしてゐる。海岸づたひに長谷の方まで歩いて，夕方暮れる頃帰って来る。

✓川ノ辺ヤ薄ニ風モ吹カズカモ

✓藻草多クチラケシママヤ秋ノ浜

✓貝拾ヘバ心ナゴムヤ秋ノ海

十日

晴。

- ✓藤椅子ノ脚ニ蟻螂ノ身構ヘヌ
- ✓蟻螂ノカナハズト思ヒケン逃ゲ上ル
- ✓蝙蝠ノ逃ゲ上リケリ我レ勝テリ

- (✓コスモスヤオノモノモノ花ノ向キ  
✓コスモスノオノモノノモヤ花ノ向キ

- ✓梨一ツ机ニ在リ又昼寢覚メ  
✓花ノ中ノ花トハ云ハズ赤マムマ
- 

- (✓山ノ家ノ二階ノ真夜ヤ野分聞ク  
✓蚊帳ヤメ<sup>シ今日</sup>□□□□テ淋<sup>サ</sup>シキヲ募ル野分ゾモ

十一日

- ✓起キアガッテ打チシ秋ノ蚊ヤソコニ無シ

十二日

曇，後晴。

十四日

曇，午後晴。寒い。

十五日

どうやら晴。風が出て寒い。

十六日 日曜日

曇，晴。

十七日

曇（小雨），午後，晴。風

十八日

晴。朝のうち風が荒れたが，午後は全く風いで，静かな悲しい秋の午後である。  
前<sup>股</sup>腿の腫物二三日前より脹れひどく痛みはげしく，昨日今日，率ね床に臥して居る。

- ✓痛みこやりここの二階にこやりをれば夜半し鳴く蟲しじに啼く蟲

十九日

朝、一時日が輝いたが、ちきに曇ってしまって、静かで蔭鬱で泣き出し度いような半日の後、夕暮からばらばら雨になり、夜はしみじみと霖雨じみた降りぶりで、鬱陶しい気分だ。

二十日

秋晴れ。美しい秋晴れ。

✓赤蜻蛉にみじかき秋を赤蜻蛉つるみつるみ 飛びみじかき秋を

二十一日

朝、暫らく曇、後、静かな秋、小春の日。

(抹消)  
[✓築山ノカゲニ十バカリドングリガ忘ラレテアリ秋日ニ光レリ]  
✓築山ニドングリノ実ガ十バカリ忘ラレテアリ秋日<sup>ニ光レ</sup>□□ウララカニ<sup>147)</sup>

二十二日

晴。

二十三日 日曜日

晴。午後雲多し、午後、荒木サンの方々が皆サンで見える。  
久しぶりで十分程庭に出てみる。

✓梅の葉のあらまし落ちて隅広き

二十四日

晴。悲しいようないいお天気。

✓脚を病みて二階に居るや小春昼

二十五日

静かないい日、去年のこんな日に、三沢と中野のお祖師様へ行ったのを思ひ出す。

✓祖師堂や木屋の古樹のかをりここにみつ



二十六日

秋晴れ。少し霞んで秋がほんとに深くなったようだ。

✓ビーズ拾ふや針持ちしままに子の寝ける

二十七日

晴, 曇

二十八日

とう〜雨になり, 真暗で終日冬になる小雨が, じとじとと降りつづける。

上原寿造氏から

「万葉紅を染むる北国の景色は御覧に入れ度い様です。桜などは花よりも紅葉の方が美しい位です, 漆, 錦木, 鬼ツタなどは何とも云へぬ色です。之れも一ヶ月過ぎれば, 一面の銀世界となって, 来年の三月までの冬籠り, 少々閉口」と

紅葉紅葉やがて来む冬は遮莫  
 ✓ □□□□□□□□□□□□□□  
   いつつき                  さぶ  
 ✓ 老の身に五月の冬は不楽しけむ  
                           いつつき  
 ✓ 紅葉紅葉やがて来む五月の冬は遮莫

二十九日

曇

三十日 日曜日

曇, 夕方暫らく晴。夜, 雨。遠雷。

十一月

七日

十月三十一日の午後, 東京に出た。十一月一日, 朝から弟と明治神宮競技を見に行く。二日, 一人で朝から神宮競技を見に行く。三日 (明治天皇節) 皆が出て行ったので, 一日留守して, ごろ〜してゐる。四日, 雨。早昼で帝展を見物する。五日, 雨で一日ごろごろ小供の相手。六日, すばらしく晴れる。朝, 英子と小供達をつれて新宿に買物に出, 別れて自分は鎌倉に帰って来る。

八  
□七日

晴。静かな晩秋だ。

静かに横はってゐる腕だ  
無心に凭れて居る白い腕だ  
白蠟のような滑らかさの下に  
生命のような弾力をひそめた肉だ  
安らかにねむってゐる女の肌だ  
(若しか私にあんまり詩人でも、まあいい)  
曾て此の腕を荒らかな男の手が  
血の□□渲むばかりむづと掴んだかも知れない  
曾て此の腕を岩のような男の手が  
喰ひ入るばかりちっと握りしめたかも知れない  
そうして此の白い腕が  
碎けるような痛い快さに痺れたなら  
そうしたら此の無心の腕は  
涙のような苦い優しさを知ったかもしれない

静かに横はってゐる腕だ  
そうして……知ってゐるかも知れない……<sup>148)</sup>

八日

雨。終日雨でひどく寒。叔母様と百合子は、風邪を引いて寝てしまふ。

によっきり出てゐる腕だ  
棒のような一本の腕だ  
それが白くても黒くても  
それが幾分黄ばんで見えても  
それは私には問題でない  
私は画家ではなくて  
私は画家ではない彫刻家だ  
だから私はそこに棒のような外見の中に  
赤い血が潮のようにかけめぐってゐるのを

その沈黙と静止の中に  
はちきれそうな生命の躍動を見るのが嬉しいのだ  
いいや、それが無限のコンストラクションの中に  
必須な一部であることこそ  
私にとってのどんな大きな喜びであるか  
いいや、此の棒のような腕を枉げて  
決して動かすことの出来ない必然に——  
たった一つのコンストラクションを創造することが出来るならば  
私は決して私の一生を悔<sup>ひ</sup>□□いないであらう

によっきり出てゐる立派な腕だ<sup>149)</sup>

九日

晴

□□ <sup>〔三沢〕</sup> 寛様

……扱て次は俳句だが、先達のはあんまり下手だったので、遂ひ叱る気になったのだが、今度のは又ぐっとうまくなって、了って、到底余輩の及ばざるものである。其れ故、批評はやめにして、感想を少し呈する事にする。

柿一つ心も見えて柵の内

空蟬の心はめぐる思ひかな

両方とも、字句の外に<sup>○</sup>心<sup>○</sup>が動いて居ることを容易にうなづくことが出来ます。只、私の素人主義から云ふと——例へば短歌に於ける万葉派に対する□古今派の如き感を抱かせられます。もう少し説明するならば、是等の句に於ては、主観が主観のままに抽象されて居る為、そこには<sup>○</sup>もの<sup>○</sup>の姿がない。其故に現に同じ心境を経験しつつある人々には、そのまま心緒の状態として受け入れられ、同情をそそるけれども（云ひかへれば、作者が第一人称的に歌ってしまった<sup>から</sup>□□のだから、同じ心境にある人々、即ちその句に対して第一人称的な立場にある人々にもみ効果が受け入れられるのである）、単なる読者即ち第三者に対しては「如何なれば？」が疑はれて、食ひ足りないの<sup>あ</sup>で□□あります。ですが、それでいいのだと主張する一派にも相当の理由があるらしく、現に後期古今派とも見らるべき明星派の一大勢力が連綿として続いてゐるのでありますから、私は私の説を強ひようとするものではありません。只、私一個としては、先に云つた<sup>○</sup>ある<sup>○</sup>が some では物足りないの<sup>あ</sup>であつて、certain として響いてこなければ嘘だと思つてゐるのであります。即ちもっと詳しく云ふならば、「柿一つ心も……」と云ふような発想——聯想

の飛躍は、もっとも言葉の惜気もなく用ゐられる詩に於ては、屢々用ゐられ、のみならず、最もエフェクティブな技巧の様式とさへなつてゐるのでありますが、たった一ことしか云ふことを許されない俳句に於ては、兎角、句の中心を莫然<sup>〔漠〕</sup>とさせるばかりか、前にも云つた様に、普遍を欠くような結果を招来するようです。ですが、此處で或る解決を与へようとする、大げさな論文を必要としますから、此の辺でやめることにして、只私一個としては、上述のような理由で、斯ういふ技法は好きでない（何だか不安な、悪い意味での whim のように見えて）と云つて置きます。

### 君ありき思ひは文をかけめぐる

にしても、俳句の中に艶っぽさ、俗っぽさを、あながち否定するのではありませんが、思ひは文をかけめぐるは、一見如何にも「思ひ」を彷彿させるかに見えながら、直ぐ次に、或る遊戯的な気分が感じられて、ひたむきな思ひの中に——と云ふより、或る不純な余裕があつて、ひたむきな思ひをけがして居ます。「思ひは文をかけめぐる」、此の遊戯的な余裕が所謂技巧派への第一歩であり、粗朴<sup>〔素〕</sup>、単純、率直なる切実さから、復雑<sup>〔複〕</sup>、享樂（広い意味でのセンチメンタリズム）、遠曲<sup>〔腕力〕</sup>的な遊戯的芸術至上主義への岐路であります。

私は君の諸句を読んで、適当に限定的な題詞乃至は俳文が前にあつたならばと思ひました。そして反対に、そのような俳文乃至随筆の後に是等があつたならば、きっと洒落たものとなるだらうと思ひました。御一考の上、お説をうかがふこととしませう。ですが、ひるがへつて、私自身の句に就いてならば、それは私の彫刻に於けるように、又絵画に於けるように、例の私の素人主義から、これらの一切の基準は、決して何等の基準でもないのので、只々私は私一人で私らしいものであることを——上手下手を考慮なしに——標榜するのみであります。（それならば、他人のものも、その意気で觀照せよと云はれるならば……それは、無理であります。何故と云つて、其等の中には、何と云つても、前述の諸要素が一義的に活躍してゐて、其處には、何等の特殊なゲール goût も濃厚なオリヂナリチーも、露骨に表はれてゐないからであります。これはつけたりですが、そんな意味で私□□は、私の知つてゐる範圍では、石川啄木、ムック、ドーミエ、モディリアニ、マックス・ウェーバー、ロートレーク、カリエール等々々に、その人らしさを見ます）ですから、此の上君の俳句が少しでもまゝなつてゆくならば、私は当然、そして喜んでおいてきほりになつて残つて居ませう。何故と云つて、私は少しでも今よりうまくなるつもりは毛頭ないのですから。ではさよなら。

十日

晴，曇，曇。

✓霜月も半ばの夜なり夜をしてみて一匹か二匹かなきゑるこほろぎ

十一日

晴。時たま曇り。

午後、秋庭サンののをばさまが来られる。

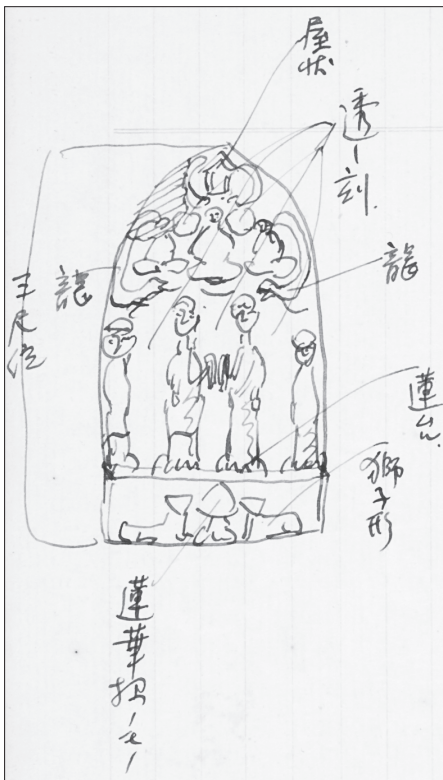
✓西日深く懸<sup>涯</sup>崖の菊の半ばまで

十三日 日曜日

晴。風烈し。

三沢と荒居君が東京から遊びに来る。一緒に昼食をすませてから、天園<sup>150</sup>に出かける。天園は思ったより遠くて、思ったより高くて、私のびっこの足には随分つらかったが、道に久々に外に出て半日歩きまはったので、気持ちがよかった。

朝、妙本寺に人が集るので行って見たら、先日、石禅師宅の涯からあらはれた、古共同墓窟（北条高時一門郎党のものとの事）から出たといふ大理石のレリーフで、なかなか立派なものである。



こんなもので、後に銘あり、曰く、〔武平五年二月廿二日永（半分かけて  
〔字カ〕

武平五年二月廿二日 永（此寺半バ欠ケテ詳ナラズ）

季寺知暈造玲瓏白

玉像一區上為皇帝陛

下又為无遍衆生有師

僧父母劫課衆生居同

侍仏

とあり、なか〜古いものらしい。此の文で見れば、明らかに支那のもので、武平と云へば、わが敏達天皇の頃である。が自分の薄ッペラな智識に少し不思議に思はれるのは、銘文の刻字が妙に四角ばってかたくて、少しも太細がなくて、少しも癖がなくて……だが、龍などは、如何にも六朝風の匂ひのあるもののように思はれ、獅子も非常に面白く、立像のお腹の部の出っぱり具合なども、人体及び装飾のデテイルも全体の結構も、支那古代のものとして、疑ひ度くないものだ。今出来かけて居る八幡様の国宝館<sup>151)</sup>に入るらしいが、何う云ふ鑑定を下され、どう云ふ歴史伝説が発見されるか興味深い。荒居君に写真をとって貰ったから、暫らくしたら出来てくるだらう。

#### 山道雑句

- ✓此の山や 山いっばいの 薄かな  
〔抹消〕  
 [✓谷川や 音せぬ程の水清く]
- ✓山道や 摘み捨てし花 ここにまた
- ✓杖に倚って 登る山路や しかすがに
- ✓烏瓜に 石投げて行く 登山かな  
〔抹消〕  
 [✓またありと聞くや見上る烏瓜]
- ✓水引や いとけなき日を 慰みし
- ✓水引や いとけなき頃の 偲ばるる
- ✓此の風や 下山のわれに いとつらき  
〔抹消〕  
 [✓言多く帰り山路の足すすむ]  
〔欄外に記す〕  
 [○落葉しく落葉のひまにほそほそに流るともなき谷水の澄み]
- ✓此の山や 霜置くまでの 薄かな
- ✓畔道に 蛇くねくねと 死んで居り
- ✓畔道に 死蛇のうねりの 力なく
- ✓見晴らしや よき程の労れに

十四日

晴。風烈し。

十五日

朝のうち曇り。午後、雨。

〔三沢〕

寛様

先日ハ遠路御来訪忝シ。

只今御手紙拜見、早速ノ俳句、期待センナレバ、驚カザルモ驚ケリ。

◎栗落ちて庭ニ声アリクレノ秋

正ニ銘句に近シ、只小生一個ニシテ云ハバ、斯カル句ヲ発スルニ、自ラ省ミテ、恥ヅカシキ感アリ。何トナレバ、未ダソレ程深キモノノアハレヲ感ゼザレバナリ。即チ小生ノ中ニアル「栗落ちて庭ニ声アリクレノ秋」ハ、先人ニ教ヘラレシ境地ノ概念ニ似テ、其ノ尊サヲ重々知レルモ、感ニ於テ兎角切実ナラザルモノアリ、誠ニ恥ヅカシキ次第ナリ。

●檜葉垣ノ向フニ見ユル隣家ノ栗ノイガ割レテ実が見エテ居リ

●縁ニ立テバ隣リノ栗ノ毬イガ割レテコッチ向イテ居リ実が見エテ居リ

小生ノ煩惱未ダコノ辺ヲウロツイテ居ルナリ。困ツタモノナリ。

◎魚スマズ落葉バカリナリ蛇苦死池

面白カルモ味固キ感アリ。蛇苦死池ガタイシタ名勝デデモアルナラバ、コノ位ヒガッチリシテ居テモ、猶句ガ重クナルヨウナコトナキヤモ知レザレド、正ニゴミタメノ如キアノ池ニシテハ、句ノ方ガ勝ッテシマッテ面白クナキガ如シ、小生ナラバ

●蛇苦死様ノオ池ハ落葉バカリナリ

此ノ位ヒ間ガスケテ居ル方が、タマタマ蛇苦死様ノ池ヲ知ッテ居ル人ニハ頷カルモノノ如ク思ハルレド如何。

◎白岩上老松ソビエタルナガメカナ（姿カナ）

白岩上老松ソビエタツ姿カナ

此ノ絵(?) シンプルナレバ、強キ方ヨロシカラント思ハル。即チ「ナガメカナ」ハ仰セノ如ク「姿カナ」ノ方ヨロシカラン。更ニ「ソビエタル」ハ見ル者ヨリ、見ユル形ニシテ稍ノドカナリ。老松ニ即シテ「ソビエタツ」トスレバ更ニ強シ。白岩上ハ母韻多クシテ和ラカナレバ、当然白岩上ト読ムナラン。□□白・岩上 〇〇〇トアクセントヲツケレバ、カナリ感ジハ出ヅルモ、字ノ意味ヨリスレバ、白岩トツツケタクナルナリ。サル時ハ、

白岩・上ハ○○○-トナリテ、スワリワルシ。即チ○○○-トナリタキ処ナリ。思ヒキツテ白岩上頭○○○-トシテハ如何。ヒドイ字アマリトナレド、感ジハ寧ロヨロシカラン。其上<sup>カ強</sup>□□表現トシテノ力強サヲモ得ベシ。

◎夢ノ跡苔ムス石ノタダ一ツ

夢ノ跡ハ屢々用キラルル句ナレドモ、ゴマカシニカタヅケタル感アリテ、小生ハ嫌ヒナリ。<sup>〔漠〕</sup>莫然タルコトヲ免レズ。

●北条某戦死ノ跡ト石一ツ

コンナ風ニアケツパナシニヤツケタ方ガ数等氣持ヨシ。

◎南涯ニ小菊乱ルル閑家カナ

稍凡ヲ免レズト雖モ、暖カキ句ナリ。閑家ハ稀ナル語ナリ、カシカナリヤカシケナリヤ、ノドヤトデモ読ムベキヤ、ソレトモヒマヤナリヤ

小生ニモ菊ト日ノ句アリ

●西日深ク懸涯<sup>〔崖〕</sup>ノ菊ノ半バマデ

◎茶黄緑三ツ冴エタル椿哉

ハ、近代的ナリ。ヨキ感覺アレドモ、才氣バシツテ君ニ似ツカハズ。悪シト云フニ非ズ、益々試ミラレタシ。

蛇苦死人

十六日

雨。

✓障子入レテ小暗キ部屋ヤフカシ芋

十七日

✓霽レシカバ山ノアサニ似ル秋ノ色ヤ<sup>モミヂ</sup>黄葉シミジミト露フフミツ

今朝がたまで降ってゐた雨が止んで、十時頃から日がてりはじめていい天気になる。が、午後からは、氣狂のような風が吹きあれる。

十八日

ノドカナ美シイ日、午後ブラブラ出、海ニ行ツテ長イコト砂浜ニ寝転ンデ居タガ、ボカボカト暖カイダケデ、サテ別段ウマイコトモ考ヘツカナイ、ソレカラ大仏様ノオ庭ヲ



ブラブラ歩き、長谷ノ通りヲ店先ヲブラブラノゾキナガラ、夕方帰ッテクル。

- ✓青桐ノ黄バムウシロヤ松空ニアリ
- ✓蘇鉄売ル店ニ懸崖ノ菊一ツ見事カナ
- ✓大露仏半眼ノ影ニ秋移ル

十九日

曇、晴。午後、昌道の事で一寸師範学校迄行ってくる。

二十日 日曜日

すばらしくいい日曜日だ。静かで天が澄んで居て、地が幾らか幾らか霞んで居て、風がなくてすばらしくいい日曜日だ。夜、叔父様と子供達をつれて、横須賀の水交社に音楽会を聞きに行く。

- ✓裏山ノ枯松<sup>コショウ</sup>天ニカザラヤ秋ノ真日
- ✓裏山ノ枯松<sup>コショウ</sup>天ニカザシテ秋真昼

二十一日

曇。昨日とはまるでちがって、寒くて暗くて、今にも降りそうで、今にも降りそうで、でもとうとう降らない。

二十二日

晴。朗カ

<sup>(三沢)</sup>寛様 御手紙拜受、今度ノ諸句<sup>グント</sup>面白ク読ミ候、小生ニ句ヲ示サルコト僅々三回、二ハ一ニ倍シ、三ハ二ニ三倍ス、神足正ニ驚ク——否、恐ルベシ。

○日午ナリ縁ニ<sup>テ</sup>座<sup>シテ</sup>鼓<sup>ヲ</sup>聞<sup>ク</sup>

正ニ技法ノ何モノタルカラ悉知セルモノト云フベシ。(君ノ字ニ<sup>テツ</sup>座トアリ、<sup>トツ</sup>踏ハ越ユ、過グナリ、<sup>トツ</sup>踏ハ足傷クナリ、<sup>トツ</sup>踏ハ大坐スナリ)

以下其々ニ勝レタル句ナルコトヲ前提トシ、更ニ小生ノ及バザルコトヲ告白シテ、尚何カカニカ云ヒ度キ心ヲ、小生ノ悪癖トシテ許サレンコトヲ乞フ。

○菊ニ蜂帳子ニ蠅ノ日和哉

<sup>ハチ</sup>蜂ハ<sup>アブ</sup>虻ノ誤ナラズヤ。今頃小菊ハッ出花等ニブンブン群リ遊ベルハ概ネ虻ニシテ、蜂ハ極稀ナリ。而シテ、飛方ニ於テモ蜂ヨリモ虻ノ方、誠ニノドカニシテ、日和ニフサハ

シキ感アリ。試ニ捕ヘテ見ヨ、十匹ノウチ、チクリト刺ス奴ハ一匹居ルカ居ナイカナリ。ダガ日向ニ群虻ノブンブン遊ベルハ誠ニドカナル限リナリ。日和モココニシテ絶頂ナルコト正ニ同感。帳子ハ障子ノコトナリヤ、ソレトモ何か似タヨウナ帳子ト云フモノアルニヤ。

○日ニ浴シ縁ニ爪切ルヤ秋ノ蠅

此ノ前申送りシ如キ、小生ノリズム観ヨリスルトキハ、「日ニ浴シ」ハ、c-cニテ、次ニ一音ノポーズヲ要求スル如シ。サルトキハ「日ニ浴シ」ト「縁ニ爪切ル」トガ対立シテ、前者ガ多少重クナル如シ。此ノ意味ハ

{ 日ニ浴スヤ——秋ノハハ  
縁ニ爪切ルヤ——秋ノハハ

ニテ、秋ノ蠅ニ対シテ「日ニ浴シ」ト「縁ニ爪切ル」トガ、均衡スルナリ。「日ニ浴シテ」トナレバ、接続ノ意味明カニナリテ、「日ニ浴シ」ガ「縁ニ爪切ル」ニ形容ノニ從層シ、反対ニ「縁ニ爪切ル」ガ中心トシテ明ラカニ浮ビ出ズルナリ。末事ニ似タレドモ云云。

○金魚死ンデ此ノ冬淋シ目高哉

此ノ句ヨケレドモ、内□容アマリテ句ニアフレタリ。就中目高哉ノ結句ニ於テ此ノ感深シ。此ノ句今直チニ小生ガ何トカ云ハンコト、惜シキ思ヒアリ。君ニ於テモ一度ヤリナホシテ示サレ度シ。

○日落チ濃藍ノ空ニ葉黒ク

此ノ句スバラシ。カカル句ニ於テハ、ソレガ俳句デアルコトヲ要セズ。一時俳句ノ革新運動ノ一ツトシテ、勢ヲナシシ字アマリ派ヨリ、近時短句ナルモノ独立シテ、自由ノ天地ニ樂シメルアリ。

✓唾ノ子ガ笑ヘバ皆モ<sup>答</sup>□□□笑ウタ

ノ如キ類ニシテ、独自ノ味ニ、伝統ニ拘セラレヌ広キ天地ヲ蔵セリ。近代人ノ近代的感觉ノ澆刺タルモノ、句ノ形ニ捕ハレテ損ナルモノ屢々アリ。同時ニ玄人ニハ思ヒキッテ感情乃至感觉ニ忠実ナルコト、能ハザル如キコトモ多カラン。我等素人に於テ大イニ勝手ニ振舞フコト——玄人ノ尻バカリ追ヒカケテ、結局及バザルニ勝ルコト数等ナリ。

○フト路ノ木下暖ク若葉哉

若葉哉ニ於テ稍物足りナキ感アリ。「木下暖カク草青々」トデモスレバヨロシカランカ。木下暖カク若葉哉ニテハ春先ナリ。春先イチハヤク萌エイデシ若葉ナリ。草青々トデモワザ〜コトワレバ、他ニ青々タルモノ少キコト明カナリ。或ハ草ニ非ズシテ樹芽、木下枝ニアルナラバ、秋芽哉トデモコトワル方ヨロシカラン。或ハ秋芽遅キ(クマデ)ヲ

云ヒテモ面白カラシ。

○フウワリト此ノスミ日蔭ハツ出花

フウワリトハツ出花ニ対シテ、此ノスミ日蔭ハ少シク丹念過ギル感アリ。コレダケノ事、是非云ヒ度キニシテモ、此ノスミ日蔭ハ稍煩シ。

○日ウラウラ遊女ノエリニ公孫樹カナ

美シキ画ナリ。ヒドク懐古的ニシテ、他ノ句ノ新鮮サト相隔レリ。遊女トコトワリシ故ニヤ。ココマデクルト個人ノゲーノ問題ナランモ、小生ナラバ「女ノエリニ」ニ(ロマンチック)テ足レル如ク思ハル。否、其ノ方ガ「エリ」ガ浮ビテ、同ジ画ニシテモ装飾的(実感的)デナク、(実感的)感覺的ニ生キ生キスル如ク思ハル。

●ソノウチニ出京シ度ク思ヒ居リ出京シタラオ寄り申サン

●花ヤヒカン将棋ヤササン話ヤセンドレモヨカラソノ時ソノトキ